貞享式海印錄

表許物四句
裡自巻拳句
奉納夢追善
人倫姿用情
山水塲居処

二

へ5
4676
2

門 へ5
庫 4676
巻 2

昭和十六年一月□日
尼野貴英氏寄贈

貞享式海印録二

曲齋述

本云 俳諧に指合の事ハ連歌の頃に傳ハ起て新式の
ことまゝ傳れとも其傳の不寫ずして初心の誹諧なるへし

□去嫌翁論

▲家翁ハ誹諧の宗なれハ古法の去嫌を固とせずと
いふ人あれとも誤寫にてやあり然れハ古式に或も
五去出モ其句々の出ありを依て三去も二去も其理
ある所ハ斟酌をもなされけり「初心ハ法令を許せざる
をもて古式に拘るなれハ之に素より去嫌を恐と
せされハ是と定る捷あれと門人ハ其席の法
を從とせしなる人々毎る説も同意の説もあり
今則とせし句去を定きわきをとる(今まる之)
一句の好悪を先沙汰して指合ハ後の僉義なるへし指合
と云辭のまゝ去嫌と云字の義之指合去嫌乃
用ハ変化の為之と先其故を志るへし

一句の母要ハ他のるあ寸若句を見て一つ見ふさる
ゝと胃雑の変を法するゝくゝお時を変る時のゝ
猶の紙と筆と対ても忘の字ひきたゝて胚とせん
も生死の法い時と除て法一又句を其体と分る時を
拙句と花天空と変るゝ其体通い許すゝとそ
接合ハ字数のゝ去題ハ神尺意無名久知山川
衣食生性ハの種類を別る度毛の変くしたゝ陸の
食義ばりさるい意ハ二つ五るんゝ句続さる
も半句巻頭句をゝと並さる変格もあるゝ代を
若句をゝ句ゝ胃雑の変あて接続の度毛を伝乃
変るあもむ拙宗匠の紙ハ義の合ハを述るのゝ
るを句ゝ出る毎ハ接る分れの法ハ乃巳の臣変の
ゝ変ゝ句ゝ出る句対もお代の法を立て法ゝ句を出す
字面もあるゝ祖法の異見ハ出るゝ句
変代の予句を立ゝ世ゝ接合去題の接あて弟
拙の法式ハ出さひゝて書ゝ

連歌ハ去題を立ゝ変化のあるれと弟門ゝ共の
句を接ゝるゝ法あるゝ法て京式ゝ頼ゝすと
其座を動彼せゝと法ゝ作ゝ接ゝ弟門ゝ用式ハ
雲秋五去ゝて二ゝ又ゝ及「云ゝを二去ゝて一ゝ二
ゝ五「冬ハおゝ一月ハ面ゝて五去ハ数のおて
凡除様ハ変のさゝとそいるゝお好のさゝも法
法を破さるゝて去ゝ其余毎神世歌無無乃
出ゝあゝ生性名処数のゝおゝて必ゝする事
ゝきハ元来他法ゝ森羅万像の変ゝ在て法界の
程を修ゝ物乃あれハ限のゝきゝ作ゝさゝハ月
冬のさゝも乃ゝまゝの親ゝめゝと表ゝ風雅の
標を立てゝ他の大発を為て其表式を作る凡
ゝ一其意を破ゝ建門の意地ゝれハ其凡を初て
加減すゝき乃ゝ作ゝ学ゝ去先ゝ法意を以て附ゝの
風味をゝ作ゝ修ゝ家ゝ去題の部を分ゝ
直指門人の手記ゝ其代の法句を考合其程一

あるおを正格とし例稀なるおを変格とし云
まをて出し正変ともに異なる所を加へ所捨い法君
のまに倍を学ぶの弘い性者の行止を補まる

□表の部

[京三] 表に神人恋慕の名変名を嫌ふ名物者
之を二者の勢力を示す方にて口上の五句に匂ひて
初打に付くものあるを目立耳立ぬを法とする
▲表に嫌ふ所おを忌諱する新らしあす只目立耳立
おを表に勝て行ふ流まを尽さむおを以て
人名異や文の古式に林るおを法ら俗多し
[三冊子] 表の内鬼が成らう説所に著りす其の教
加待あるの教に用捨すし句一句に字と渋る
▲只古式を弱に流て出おを表に出す其字を嫌ふ
嫩娘も亦男字も嫌ふむや十二ひく流句を見よ
又地秋の鬼い左けるあと象あり象の忌忌
忌ぬ中の比おを平生おを生涯を表に悪さる事

何に仮鬼を作く〳〵べし

△表に情むお

神秋 京名 恋 恋 名 名 京 新 武 名 物 女 名

別名 供名 重病 重述懐 教 戦 耳 怪 法

△表に不情お

・去名 風流名 通名・軽 軽 耳 の 妹 妻 男・軽 述 懐

美 新 年 盲 新・軽 病 医 業・懐 古 非 名 美 旧

・非 神 非 人 非 恋 お 義 新・旅 出 の 京 旧 郷 田 舎

大 出 名 無 名 京 旧 辺 名 お・雪 歴 小 伝 新・鬼 雪 法

序 祇 程 の 恨 お 出 の 白 人 ま 二 に 五 あ く あ る い の 白 目 立 下

△変名 風流名 通名

[三冊子] 土地方日古今の人名表に生ずるをいう作むも
陸日今の人名い情むて古人のみいおようりて云
しるましされども好くしん姫
▲今の人名は常時名なき人の情に但京に通ふ名い
ようおようは新奇仙名まの耳ようあく

杜実ワ時多き弁乃瀬 九峯
冬 三 あ門の三水ニ泊造セて カ兮
英刈 紫垣ニ掃部始めを修入て 乃ヲ
杜 ふおよ祖父の刑ヲ多を保て 朝式
多食 四 ヲ南度の古き ふち采 翁
保 六 紫地ち采ヲ典茶の 雪 酒堂
野百 紫のあ〜戸ニ大納云度 元宣
他 初雷ヲ初堅ヲ ヲの 本白
桜 九 老て元侍長い老を 活り 翁
八夕ワ ろ〜も 杜の 稿ヲ 採出 乃考
都 三 雪村ヲ柳足ニ ゆく 搾さて キ風
勾 西門の耳法性さよ文 て 化已
雪村雪ヲ教侍あれる風 隠人の部ニ入て杜と寺
コ八 四 西郷ヲ重の屋こき屋や 京辰
ひき 五 月ヲ子ニ 打位の家を義ニ至 正秀
奈二 老あく竹の林の 示 巨 舟 保水
冬 六 杜花を多きる 矢徳の高 正平

脇 ワ 雪ヲ列こる 望の百 郎 乙孝
原平方三 友内ニ郎の始末侍セ て 杜ニ
杜 杜の名ニ市ニ ま度 あて 有已
八多 四 鳴 ゆ〜ニ 庫の 介 度 細堂
れ 正宗ちやとて おめて きむる 嵐雪
、 五 石堂ヲ笠い嵐の 俗考 庫答
吉春 六 下男ニた 七市 其時 翁

△兼教代軍徴 百姓く
夕ワ 三 武稿ニ 佑きく人き 陸足えて 西雪
八夕 耳部ヲ 冷ニ 風の 杜立て 示弓
四幅 教軍ニ上戸い 背ま 柄〜て 紀白
十五 軍兵い あ ニ 沈方ニ 角足て 五角
ひき 四 ま きも 杜もあ 右刀の 引ち 翁
去 よろひ あ〜の 大ニ あ る ち 風
白時 斉去 追 信〜 玉川の 多 キ角
雅 杜風 ま き む 陸の 乃 列 才尤
一拍 五 多へ る 耳 信る 杜の 月 、

其常ニ いつ月ニ為化松ら武去一人 弱
冬 ちもあき吳ニ月の為こと 和芝
△独逸懐兵老翁女仙人
法ほう 三法 拵ら 接の七食 弱
和茄 阿房お男 蓋てあくさむ 楚彼
小弓 まつ暗くと又ぬ一をる カ弓
他 ちいつけて七のうち 雲芝
朱麦ニ 他っても栗のいっくく 神猿 相紫
七さく 討ふ人もあ兵を他て月独 乙甫
梅干 熟年ちいちんくよん男 伯桃
ムウ ニ育の猟うひく 宣 お 仙化
山ト ろ士のあくまれれ 拭し 同次
立衣 効代い只 茶色 あく 長竹
コハ ニ 女中旅ろの後架う 幕引て 蓋を
八ち 子ようち女中の使 拭考して 風石
炭 祖又ちまの大梯も為ま斗と キ角
一稿 ニ 姫すむ尾ワくの糸くる 佳風

ひさ 釈る 垂て 月ニあく 弦花
門前次 子い拵ておく杖の仙京 風垂
ヤハ仮老く持子表ニ出ちいおニ又寺変拵ちや
古拾 て作ろうて 仙情ニ入 弱
独ちか仙ニ 仙人の門店あれ ち月ちう 拵水
七ヶ及多仙者
△疫病医業
ケ ハ 門連する 医志のそさくさ ソラ
対 某きくひの一長ニのむ 髮枝
、 物のいくくのちろと考く 十丈
医ち 先のたつくをすきと考くし 和七
ニの 水ろ白を 花ニりく 去芳
和茄 喉乳のあとろ 拵も炎ま リタ
和辰 長の久天のいちひ 直一 桑ふ
ケ 拵の才ってふをする 和茶
他 ニ 食物の拵を干ろく船の月 コ風
吉老 一冨ニんの 保きすの才 方木
岩多 ニ 数年いよれとすうある条 地敵

△懐古 非会 左義同

拙盗ハ何郡の吳天ゝ芳 笑る 拙士
菫 三 二月末 赤山山ニ 斧れて 東夜
和歌 たゝふやゝ郡の名のゝ残されて 笑天
ハ 六 古の先祖い弓張の 月 相ヒ
沖 五 古戦場月も移る 夜 嵐ラン
拙 六 古き代をしらぬこゝのふゝ 嵐寄
や 三 乳味のまき和歌結ひ忘れて 歌来
印 五 相見ひろゐの寄のゝ見えぬ 歌生
資 歌ニ来ていびきを借る 時寄 キ角
ゐ 六 さるの浜ゝ 歌る 拙の実 弱

△非沖和

育フ 歌めぬ 出て 拙ふ 空 拙ゝ
仏 三 層よむ人あきやる 安くおて 寄ふ
ゆ 拙衣の打目もり人と 表ゝ 拙て 東伯
サル 下 深夜て 下されニ ソ男
ハ 十人ゝ ゝ 行ふる 千年
ハ

歌 五 年の歌尺ゝ尺や冬の月 田東
岩 雪ふゝ 寄ふあきまゝ ふゝく
天ハ 六 行ふふる 寄の乃中 コ杖

△非釈和 五 清滝

梅十三 尾ゝも冥の水乃 冷 仲去
炭 面上陳教を姫の明生て コ原
歌 表吳尼の陳教ゝ ゝ 和愛
ゝ お拙ゝ尼ニ拙を あれて キ角
撓花 小坊ゝい人十の後ゝ 拙 寄侍
山ト ハ あゝまゝれニ 来ゝ小坊ゝ 山ニ
花拵 撓投成の 比乃 歌 角
ハ 坊ゝ久の先ゝ ゝ 貸水
角 笑ん世界ニ 伯母の法法 栗ル
文殊 五 出め抗もゝれぬ拙の 加性 東伯
十七 歌行て利賢ゝ ゝ 草の月 呑ハ
みゝむ ハ 床てあゝまを ゝ ゝ 支考
仏 六 ゝ れて 拙ふ 盗の友連 弱

素木 仁 山のあなさのうすかくく 翁
白タ 五 吹清の茶てる金ハ月よちやよ 少枝
本お 月灯も眺らう成て後秋のうす 何文
△泚意お 元武会
文の 三 捺情を書する花乃情にて 京示
奈 仁 みをらんうつくす 薹りて 以之
岩タ 言チ 一升の店の小るお 武般
アラ 人を寄る迚乃抜下附 昌房
少文 五 木刀の声は夕える居合抜 翁
佗 仁五人て万ろ中を位まふ秘た丈 猿雖
、 六 鍋の角を淺す翁まひ 風麦
△旅玉智京田舎大玉名 吴君
星月乙外難 一男は日本都君来の就い皆也名く
佗 三 旅の空は菜をまく比かへむ 虎
戯 仁 川一すちそへるつ清お 山之
斉 五 京へ来て学文するたま行く 乙由
、 玉久よ都因の斤山家 鷹仙

初拓 六 田舎芝居の盆急くく 燕石
加川 三 ○独活の書ハ戯の白峯を浸みえて 知仁
笈 五 五菊内の旦那を呼ぶ秋の月 鹿本
花拓 ○拝さく関の東とうそろく キ角
星月 三 知もんの清よ姿とられし声吹て 千林
三千 毛だ言い時ちを表明して 去来
執 仁 九年よりる吉安のちやや 沾洲
天河 枕も机をぬらぬ 扇 舟 何也
仁暢 六 かゝの芝落ハ夜吹とや 佳木
△無名の名氏旧記 名和
斉 三 少乃ふ谷七夕よ月されて 林因
天河 八条もりふハ柱分の菰上て 壷平
彭 仁 秀句都よ言せさしかり 至夜
、 かくさう袖をかれし名不記 卯猶
山中 町のあられう 名不記 自笑
タテ 五 いさよなもり名不出陶タり ソラ
酒 六 藪の中をのそく 名不記 菜阿

枕 ㍊ 倚屋表ゥつくまりて足る 六之
笠 あるを屋ゥあひて云 伴 連支
蹴 三 あく素と排しき人のあと出て 負風
屋考 今ちんもあく素と足て蓋奈屋 生放
おれ れ河のトよりちきる初吉葉 比泥
大名名写懐古木の俳才三の中も出ゥ

△不伴句

三貞 三 あく草ュ出ュと屋れ吹れて 低考
弱 ㍊ 茶の生地ュ言の屋する リホ
伴 古之竹 烟る 乃のきゥる 小コシ
八夕 ふ人捕 面ふ村の伽ゥし 乃家
ゼラ 今の五ュ中いせとの雪 屋 呂杯
寄 ㍊ 川舟ゥ雪屋をく 靴 拵 有深
力佛 小仗の屋ゥひゥて 狭 第 午鼠
冬 ュ人ゥく海ュ風のおゥすし カラ
美 六 嘉おくあくたまゥュの血 嵐雪
かれも皆おゥよゥ拙するあくが殺をゥし

一句の作あくて徒ゥるおゥュすゥるあゥ屋

△怪句

拾 三 農ュまゝ牡のふ人を下ュて 弱
タリ 萩ゥ鹿狐をゥュ栄ゥて 地獄
茨川 神の屋ゥと冬ゥュ面まれて 林屋
考栗 ゆきゥふタュ市の屋 —— 杜侯
十七 七 登ゥュゥあゥュ臭の赤ゥ話の月 新水
猟 ㍊ 徒多お忘いまを生ゥし 扇ゥ
考栗 稼ゥ ゥだゥ忘の形代 キ角
、 ㍊ 三侯人の 忘を屋ゥし

□㍊句目

本文 ㍊句目い強美生屋の句表い狩文ュ大切情和ュ整く
とふい本句稼才ュをュ男をおゥる所とゥる一
人の兵や句ゥする振ュ云ゥ表れと一色の変化い侍
より始ゥ所ュ万和合と行ゥるく扱てなゥより㍊句
目ュも限ゥ武ュ変く武整く武ュ安く武ュ変く

其句の其時の変化を考へ〜〜下巻

▲句振の力を知らざる者は四月会釈をもよろむ
べき者と会釈を付てむ時は四月人必起情して
力を入ずして一度按力為て其老成立ま〜に成る
大切の掛り又「新く」に起情「新く」に会釈の掛方
安くむつ〜く」に執向のみく成れるやう句を拵へ
〜〜注句はお五十の中に下ある句にて為る〜

春信 矢絵より四月人新くする事と世も笑れと
只句作の程きまりて執向を新く拵する事を
ず条門の他社句作の程度は後てかまた尺其執向の
程き拵とんを者と配て句作おの後の事よりし
▲実に執向は句の足立のみまして者三の意を考へ
新く又〜は人〜おの条の新は要心深〜■□
に下ある句の中実の新は八■□■□に下ある句
のみと八矢絵の四人は句を仮て新く又五
を程く拵とあれう新は句作新き近句のみ

とんの意こそは非〜又四月見俗は句を振句く
おを振ぶる者の振を云ふるこも誤〜又四人
文神を比すれい舟をいむ比字後あ〜蒸つ
亜注命〜実に拳る去尺天神其納の四人を又よ
柿十　に　舟いあち〜と又ある松月　七る
者

△五句を下の中

稽蕉 八句乃内者之四句六句ある八句
を仮句やとする中大切なく
▲古式に五句より十句人を之の体を定る者も
有あ式より趣を立て一定の変化をあり蒸つ
ま〜に変乃変化を宗とする所と数の方に志ひて
制き句振とあり句くる中句絵志ひる程〜られ
古式と制のかゝる新〜んはよう〜

□祝移

祝移と宗おを出すを待を比テ蒸に志世の変し
表六人の句を表て付新て四上仮多れを一つあく

仏　コ　おりてしられぬ人を見ゐる　翁
与　み　吹借す杉も起きす比　社　左柳
岁　又　あられふる左の山ハ蓑の方　小枝
之　ム　葬れハ今ハ隣くる待て　ヤ八
楼　名　戸隠の山下小家の静まて　き角

△祀移後表の角〻同題不書

小文　ウ　まるゑ居のせん〻ちのふんして　翁
ノ　妻の日ハ座やの仙の涙つくると　山店
時吉　ウ　冷きく丹らし下す秋の比　、
ゐし人ゟ殆をかきろく田舎ぬ　去来
低　むゑゐの信のはうくる秋の風　翁
夕ヒ　素實とさくハ道も佐りくり　流化
施を　ノ　きろくと淀まぬ水ハ去の風　翁
達掌　ウ　むろ〻と桐のも送る弟承珠　、
川鉄ハいくたと翁を見せうり　仲来
长ラ　川一河あち〻あちく出代て　旧楓
水　谷水の宮ハせられて花筏　り高

董　ウ　雅六の帖を文ち出さし　翁
文意　弄よみて女ハかひこ待り　、
蓮　跡余りて里宮素の床ゐ　千那
丹波ら寄宮の三嶋翁知て　、
アお　鳥ともの七中をめ〻す和しれ　、
お　ノ　十五〻ゑらるれハひとくりと　太大
日亜　三ゑ〻秋是ハ出しるも是枝せ　杉風
三日　ノ　さく波の三千坊も多年して　凍ト
山尺　むあせハ山の和尚の九折　柳ﾛ
ひさ　ウ　まるハ皆てもくと鳴やらむ　正秀
鳴せ　ひきりあく里ハ春をえらきちし　珠石
此程あくるハ至まあます

□句巻挙句

[古今五] 兼好ハ挙句の撰とせす六月後のてき哉依哉まハ
花伝書ハ哉ハ祝言の会と以哉ハ哀傷の席と以時ハ太多
宗匠の方る事れハ名称の花をも宗匠ハ望むる之拙ハ
挙句も花あすす更花を会む〻へ入れハ哉ハ一座の老人ゟ

式い祝儀の型式を正しくさうい型の始終を調ら
三名を拵ると今の仏陀に挙句を各々の筋と云て
別又人で発句掛す人も其位を立て果い挙句
も云持れとさうい一位の仏壮仏壮て云式の位に及す
と云ひしるる儀式の仏壮と云物挙句の終に有て名
字の肩に机きと云一名に名字る机挙句に略
名す位に乃す拵い祝云哀物の句に祝云哀物の
名物の花いまよう仏用の仏陀あれい挙句も句の
掛ると云た其花の用を用云きく式挙句云実を
詰て時きまき一位の仏壮は句に春の挨拶あて
名物のもい哀物あむも挙句に位の式庭あれい
きて句の附云に乃す附に拵合ぬ前季を
掛て伯玉新京の時宜によりきく

三長 句の花と云ふい子句と云悲に云ふ式花の
会に中きる子未孫の花方に意熟い千句開位
に香を炷れ句の花と云ふ悲に云ふ

◆六古式之発句は仏の其句を仮て句の意を句とする名なり

△前の句を再用する句

春栗　待商人まを多る　冬開口言て　鬱る　鞭　弱

句　待商人花を貪る　角

、去開日られて　苦吟　弱

却ってこちらもを待分く　仏むくに

及すちるをちの時出シ、角の迷ひを駆て

其日　花名に仏を去りくあり日うか　山只

乃味一味に初る独活の芽　百何

句　あちらむくにそ恋のむるちい　吾由

、　茂山吹に　久しの雫　桂物

あいやあや名を人を掛月　何

仏のりざも出に考く柿　花フ

仏仏字不宜

初　仏むくに及くい山のもう吹　杜吾

句　――及す――　物

、　ちれきを実に言に乗の去　吾

初冬　雪ふる笠を送るや笠の雪　依角

小まさを舞ふよりぬ暖　嵐七

白　雪ふるに又送られる笠の花　角

、　冷生人去の留も為　李

慶古　白雪　ちるよる雪こやの雪のひかり

白　――――きむ子の雪

[表五] 二百一去に似られる笠いとしむをうりてしむを

いまもしるあれいさるの花の云用ある雲の花の有用

ある去と秋と見おさるく

△撰集老人老油句

冬　五月　狂句風の雪竹高に似るる　翁

白　波や とそる笠のさんむ　ヤ水

■　白水干を秀句の雪に見やうう

、　さんむ白ふ笠の風　ウ笠

伊賀　仙　秋の嵐に美義連を　畦止

■　白　花あれや西に見る守両の上　青竹

赤き衣裂に神の苗代　青流

花い伊賀の素巻い新ちの松女出供田へ出るおく

さし　三方仙　白　雨を浅きるれ山も雪の時　百万

そまて格に光る雪の月　正葉

■　白　五月雨山乃　杜の三月　春白

コハ三方仙の新金魚老の茶に白ちう

斉　秋来　方仙　文月や厂いはちまちる　嵐枝

あるぬ星も生て松に去　柳コ

白　丁に乙ちに去の住　朱　松二

友　十三老　文花の吹ても馬友三百里　茅二

去にうすの七きちもあ　りる

■　白　四末て人も古栗の花に乙ち　丁杜

、　杜乃山路も春の住路も　宋義

△主客挨拶老句　七友多伊賀

栗稗に乙くもあ老の尾　翁

秋　翁の中に見出る　拶　去初

白　厂に出すちの夕くれ　、

花括　ゆくやゆきゆきすぎて凡乃考　翁
　位なむ人乃侍ふ夜菜　呂九
元七　盃の者ゑ流す　花乃波　金芝
　、　春おあくるゑ色の菊　り水
仙　　盃良乃殺教れ。むる盃乃ゑ　翁
　　とあしすゝしき苔の書窓　奇竜
ウ白　椒たゝむ書戸ゑ花の名を賛て　翁
　、　ゆき義浦ゑ乃ふの初長　高古
元九　五月雨を集てまゝも上川　翁
　　ゆゑ芝をつあく舟板一茅
ウ白　平性吟く載へき琴の花　翁
ね、　山田乃稲を祝ふ村百　そう
冬国　陽しや庵もの比乃弱物　め凡
　　未土の苔とたゝる冬柄　翁
白　丁の名称を拓く各　業会
七十　風流の法をあくや時も　涼菜
　　拓のゑしゑ和のむ乃考　翁

白やゆきて宿を送るむの考　他子
未末　おのゑ松と梅やゑのもち　翁
元七　翁ゑ列しゑゑもの以　嵐雪
白　栄ゆゑ未末を植一花の張　キ角
　、　三人吟ふゆゑゑのロくし　雪
宵　焼巾とれや きゑ高人や山梅　ホ枝
　　陽ゑ新と市花さゑつる　宇中
白　百匂の考尻をむゑト入　若仲
　、　小松の中ゑ号をきく　友陸
八夕　夕くれを師るや考ゑ村ゆ考　ゲ二
　　いつくも秋の梅ゑ松独　乃考
ウ白　松さくもたゝて夕くを　二
古今　七海や一字の歌を一字ゆ
白　青のゆ升ゑ伝る八来
尾記　九谷ゑそゑれ比角お冬家　考川
粉花　考い考天おの形の松　此水
引首名　天を旅ゑ伝のワゆ

笠　鹿サ工朱てう仕い稿ち山　其二
　　それの花さく世界あるもと　茅巻
引上句　名古やうを立て伎阜、茂葉て　二
　△立句い為作そ頭の白　吉及多者
保　青くてもあるきおを角幸　茅
　　白系五科人うるるうむ人セむ　嵐シ
歌の歌おんと白ちてう
野　日の去さすうて郭の歩系　キ角
　白　連京加さる去そ久しき　峯白
只一日白匂之豆後不ト峡水似去朱ろるの
ちも初会の夜と乃の後茅を乗ろう
おろ　風乃一日吹てをうこ久　図友
　白花い今星の光う咲　搭　支考
　　、　折乃匂の　柳　芭
支衣　初鞋や陸官岩を指て　南木
　白花ちや其角う考の見る時　考
蕉つ迄の作其き角も武曲京に見を見さむ白之

雛　月花や法隆の古社残る　キ角
引上句　吟人の雛後茅も花ム　仏化
雛　両早去ま古戦の又アり
　玄　雪ろうちろ子ろ衝や梅ク　ソち
　　白ろ土の俊地む似むる　鞋角
　　、大长刀も　梅う　芭
　　茅　草枯ろ其沈球し金茅角　山リン
　　白他汁を今人扁れむ吹て　衍青
　　、面白ホドろ目白　鳴る　青苑
白ク吟考　枯くそと名ったさて梅む　径君
　■　白　青の衝乃白だ〜ム品　枝京
京法吟考　吟の衝乃年を花や八幡　涼ト
　■　白月ろ乃ワビむ花も梅馬伝　俳水
　　、　芭ろ　ホ〜の芭中　芭
徒吟仏　月ュ广弄い小雨春の唐田ぶ　千那
　■　白花ちの八を工重陸て八乃り　友角
　　、雨乃葉の時は去風　千梅

斧宮仙 □ 歌くさ及ぬ海の新ぐ　蓬二
■ 白玉との花を集て斧枕　兆而
、枝と笠とよりぬる一ノ　筆
コ八六九伝の斧 陶々長斧行に句せらり
△本句と同他季挙句　七ヶ及多者
一樗 十五の日や門提て安く旅寝さ　伝枝
東雲や肥月ハくの漆ゆて　清風
乙鳥の後 ○ まつ啼鳥　仙尾
其節十名よりて放きにあれよ伏見茎　百花
△むの種けふや祇園のお目見へし　乃蒙
蔦の詳よ岩尖きさる ○　嵐雪
鳥却 ア吹出す揚出子の様や秋の夕　之帆
△九分てさるを断る花角力　如回
されとも及いえ出る初汐 ○　天晋
作秋 ア幻の市をそくや竹の杖　千梅
すくて出しき去る樹　蒋那
佐角悴 白鳥の濯の花よ寺本の花落　方叱

、去年のと覚も下を足くに ○　杉林
鳥莺 ァ枯庭千米刻まり若とも　岱水
墨の付さる古きふふとん　り合
白七子○も浪むの鳥千鵜花　杉風
、今の時五いえの茶尾 ○　依く
其節 ァ山戻以みるき姝が眉なる　秀和
△神ある月さらしきむ生ヒ　嵐雪
去なしの色の毛よ　樹　舟竹
△雑挙句　七ヶ及多者
花引千時雑挙する事あり挙句いほと止る作
方あれとも雑の変格あれい付侭なるもあり
ちこ コ 詠木を作て古き意をえむ　翁
米あるたを好む宮達　ソラ
市庵 、白粉をぬれる下地見ん　麦　支考
、役志もやうの衣の袿　ね　去来
雑 大星いさひき床のおあれや　嵐翁
、掃枝をさしておる古す　文　キ角

祇園　ヤイまち宮司ら姫子んそく　夕兆
コ　拍のやうに云ふ反　来る　昌風
む拍　すり汁やさ石の滴を足下て　俊石
云ふるこい木芳の麻衣　翠風
一稿　他社の稿り老もむ新の面　立志
素扇足立に合る竹葉　清風
東亡　加紙に森ーうく尾あれい　夕市
丈よんのもうく有　蓮生
長う　三弦て反のきむを降車　伯楓
風も作るれ代の畑麦　り芳
かれ　干あて莚市る面　壹平
芳井も寄て不整呂　康之
ソ　何も寄きつらの高さの明るきて　支考
よりあふ老も風雅子反　孝
反ち　打張作る世そめてられ　素民
エうて丁と丁ひとあるる　失放
松窓　夕反に否とちくれ反う　青吹

猶乃　れとて芝い態　柳士
笈　素材のさに似るさ　考
あに丁せても祇かまぬ　正秀
附　とん不芝い明める　宮明
ニ　面いさりとまれとる　十丈
浪化　出て足れい村の清の義の反　小枝
風のとやこの日　浪書
文操　面舎のきんを足れ茨木や　乙由
なーあーの明代さく　支純
方実　明くも天気の高とれ　素松
去　市も足も寄ちうよ　り風
あ　去面白き　山口　乃　カ弓
式二何に今百去の清ちく木を雑ちう

〈峯白に始て京和を不出子
付日峯白に始て和尺悲云乃名孔他キ赤の京和を
出き寺序さん注の会秋あて長き上ニまぶ式老
ニ何ぐ出さし求ちて足て却て抜き孔ん去ニを

世尊白毫を出て諸佛を照らしたまふ時に眉間の毫光
なる人あり佛告るまく但神祇制のおもや
冬　者〻髮いさむ我のうと刈　カ弓
彫　れ灯〻〻〻る神位の樹　手
印　祀主の雜奏呈ふ神位　コセム
了　さて〻白て　お度の樹　手
伝みて天竺の名和他キ数の伝いに角度抽する
さい京の遠式あれども神祇めてたきおあれい
義の子宮まで許されも最お三伝いる義の伝心

□先生を徒る白を用る伝
キリ　白生あ〻〻一つ〻形るきこ心　義
子　法弥の白を考る去　杉風
ユ義伝れ西と土白あるを伝る伝水杉風西
以て力仏一生とち〻白心
知　白樹のもりや今の門号　東花
伝まま力仏の法
日も入おの光社号　十六

とあるを後芽三伝る度打をたれい
以下も呂生おの丞あれて　芽二
と分るり東花芽三伝あれども先人と言る所る武伝
あり伝三伝宮て又一おあるく〻必箱をおむるや
ある〻

力仙八云下

□李的法乎
□木　李的の大る丈神の名を白角る伝影すて
宮人の法神之名い白ヤ三含てて伝るくれと
変化ヤ者〻ヤされ〻之伝白義を義て白義い
丈神の名を考むこいるれい法る悔るや此白義い
神的の宮之法法弓ヨ次て伝法ようれる
れる揮する与も揮するのこと言れ〻とて文的
世伝て名をきすいあき所て接扶白ま雅名
を作る〻い法度あれと神仏世伝ようる
ヤう数ヨ伝名を唱るを教とされい伝法ヨ
くて神通をそるい故てあり〻むれう
義ヨ伝あるを伝度の仏社て伝を悔くむ

吾邦の不審宜あるべきなり

ウヤヤ 正歌の白い白絞の孫を用て仕立る白法之

何の木の花とも見ぬ匂かな

▲コハ慈侯作の歌之天とあく地花とあく咲白
あとく孫法を咲て絞て作る中神祇衣木の
ん乃之拵ハ神祇あてもあくてもよ〜白ハ二白
あるも一白あるも又あきもあり者中紅色花い
種されとも見〜く汚しきるい恨む〜佐
白法之と見ますとも見ますとり熟考るま
とも見れぬあるむ又ないずトかて白ハ糊切て
絞ず又考ぬ自己考れぬ天然之宴神事を
序むふあれい考れぬトふへく見也又何ト絞ふ時
い白でもト絞ふ格之そい花を見すて白を恨
むんあれい何ハ絞白を乃ふれハ数ゆて哉ハ
絞きさるを又比身見ま去とふ事ふとに涙きる中
あれいかのこいあるもむそ切糊切いあき居之

又雪歌の白い五言十声の連て作る之

松風の白ふ絞白宮。笑乃宮。

白あさやうま。m多比の草。

もゝ〜き。新い赤老ハ。拵りて

正雪倉作の時い上五字を通考ハつりトを連声
もつり又上を主声ヨてトを通考ハ仕立るも
あて是一白考ハさる時の中と考ハてたくて
課ハ。まさめ月の宮ハ
右三ふい孝納法乗ハ作ず行橋、菱亜賀之拵
務法ハ通考連声あきを用ず去連声ハ大古の
格ヨてつりハ〜〜 文約

▲是法主流のさくと在ハ正歌ハ兵孫法流上三云正歌の
和ハ是あきるい下の法白ヨて考ハ一色お通ハ
ハ中おあくるるいまれ弟ヨて求る作ず
拵白ハ白の法をひくるあれい上の孫と下の姫と
通ハき理あ〜さるを法て考を合むとする

時に都てその相応はの程あぬ作こあるもを
をもて弱い古法を持られもむ主侍おぬの人
みて拍風のとき老梅さく徒とうう又武
那の句も上ユユそ下ユ弱ようあ作こ
曙 奉納 祝云句他つ連声を用る人あり連
声い五行和合せす我流ユ通声と孤徒を用る
▲京ムヤユ音声い大古の格ニ寄ユ他つ連声を用る
其音声ハ如の子あれ言も十句も作ユ
巷ノの用ふ〜ぬる徒句そ作こ
他 何の木のひとも言れぬ白ユ 翁
イセ
声ユ彩日を含む号 芭蕉
尺 立 門 初めある田の中の ち 翁
、 文 陳の仮屋ユ傍のまりて 定
白 短冊形す神垣の去 巴人
雪花 繁垂す徒も陳〜梅む 翁
アリタ
石〜〜 庭のきき暁 相楽

ム 武塚の女い花の名ユ名れ 、
、 祇徒句を吟るつ〜そ 翁
武ノ杉白句 徒句納ユ秋音句の傍武
ヤヘ 末日い神を友ま手思 翁
上ハ夫 言ユ上句の供お納る 示右
白ユ白ユ句を足ユ足ひむ末 素杖
末日に陳おき拍上京を迎ム民の供お納ユ
末て彩手彩する供ユ〜〜徒武ユ言う
上言ユ句を用ぬを足ユ下の傍も白〜
三日 神も言れ高き山出き白 支考
宮詣 言ユ舟を友の巧句の 林角
尺 ウ徒音て言〜ち ち句 むさう ソモン
ム ノ八ナて彩ユ人とあ〜る句 桜巧 考
白土作ユ恵の力仏ユ垂ふ神の む
神風鉢
了 カ 言ユ句 祭ユ性の音む 角右
風句徒付ユ句ユ苗代 源ト

人丸の比新宮をね〜

月　見れば月の姿あるすや大和物　源ト
まを立て杉の上をてる月　見る色
かな　なるの実を拾ずや神の社　を作
あ新〜きを去の門くし　略笑
神風数已下三首白あり

、　梅梅も素社の数や色新　素行
秋い秋と花と　風　笑

白　数万新神のちと家の花　、
紅　紅うと鶯の素孔加うず　キ新
日付白句　ひろき出合い家春の月　旦水
引者日付ようなる女侍の神作　岩新
、　果敢のつくを春の身の幸　素百

陸玄 天神を祀去い者と之梅を出他きあい者中之
必梅一あく〜後去左近舟流す流ぶ水見む
梅十　去良天神を祀方仙内
素五　ゑあを舟之ゑきてむ春の月　梅光

、去　あうん次者社舟う杜風　、
▲紙仍あり後去左近の法むて流ぶい白之も入用
あるむ家あを舟之入又舟流すあく手生更春云
女別の旅秋舟のくあするとあいるを見奉を
多く素を煙えむや流人あ手い流字も恨る
ま〜あて已の悪癖もて神重をもくに恨る舎
るそう

□爰恵用

陸玄 懐帝一灰流狩る付立ち紙用ホ引出す仍之
爰の神仏住あるい女云只何とあく又〜付い天神
の凡告とて天神を祭てる要りするや古仍之有白
神紙あるい探神紙之すく去秋林を爰又ても
爰のまを作ふるや勿法新て会会恵ち梅て
一者居年之挙白あるて〜者中爰松仍左近ホを見
者之を意書恵考電ホのもわきわちむ面を見く
▲意已下の法非あるるや法句まて明く

表紙 御　去之探字立者之者之字を爰恵後白

なくハ発句の心に見て其句へ言を添て平句付テし
但脇起の切字を用 発句の切字をいむへし 文約
◀脇起発句の切字の事 併同の説之
三ッ物 平句なくハ表六句に取 発起の句起句なくハ
表七句なるへし 平句あらくハ九仙に取る 其の
五句ハ座敷きて宜く 表九句も同し
一巻 長句ハ発起句を見て時ハ引上て平句にして発
起ハ揚て結ひ平季の平句ともに揚て常きを結
て脇句無季見ても平句ハ常きに仕立揚ハ其作
に無発起の句ハ三物にて其納とも平句
にし一巻にあれ其式ハ大体にしてよりすす
◀斯より揚る発起を揚とす時ハ委細之今掲する事
発起の物を揚て季の平句して三物とせハ他社才一致る
季の掟を確りむ表らせむよりも脇句なくハ丈に笑の
句笑の表和を添て其納して可なるむ又雑の発に
季の揚にも見ぬるくし又発起に脇句なくハ発句と見て

平句付よりも脈と目との注之十七字なきおハ長句
なれハ其作に関へき程あり是十二三字 十五六字 九
余字なとの長句なくハ少く寸へき季其も雑にて
も十七云に平句作なる物なれハすそ文外ハ告を
作て移ふ事なれ古人面前不可説夢勘破不也

コ八 雑 人並ニ数も述るやすもの湖 御
不二をおそニの平る日の九 仍狂

式ハ是に花こそ白きし揚に常きあさとえよ

三物 万家のりハ草葉の根く、 仙行
門ハ花咲のえに移ふ表
○
発揚 水仙や嗅きしに咲てあり、
ちく根ハきこ旁の紛きれ 斤雪
○
有係 秋の社にかえる絣や秋の風、
文通 芋略 斤田の膝の糸て白ふ 比 弗因
能まく月見に明も立すて 芋二
隣ハ夕日の出舟 入舟 ○
又すこに句目

[illegible]月の記念に明も芳行て
[illegible]き今[illegible]の夜
此度の二句おて貴あり句作に用と句用の法
あり用を考すと句作を略し[illegible]
と此度の秘方に[illegible]句作之此用を中
句に作の一字のみ有[illegible]れい橋といき寺して
侍とよりきこい秘方を重ねて明の句作に其
用に句人に句抜るに今歌の句あれを佐
あれと出舟入舟の作き用と市掛金る能
主の用と此句も句作に[illegible]乃[illegible]

[illegible]月日　芭蕉

帝国塔

宝暦八九月比芭蕉翁の墓碑あり
人に告ん仙[illegible]と[illegible]小孫見[illegible]傳る

笠冬　山ゥセや杖の孔向い抜　よ

後の月　敦の明[illegible]　橋[illegible]　[illegible]
白[illegible]き明を[illegible]の花　宮白

三月　義忠を所くい弟あの[illegible]傳笑俊の[illegible]松
あるまきき[illegible]所くに去お条床を重像を[illegible]
不[illegible]牧[illegible]甲[illegible]乙[illegible]義[illegible]を[illegible]
宗[illegible]ともす[illegible]一[illegible]所て一[illegible]の[illegible]代と出て
するもあり又[illegible]と[illegible]代と[illegible]て[illegible]を[illegible]もあり
但も[illegible]苦[illegible]る附[illegible]附句とふを[illegible]ふ
条留の句に麦為とカナレキと[illegible]きみ柳
多々ヤ　ナキ　とひくあく

△日賀

一　梅[illegible]二月　中旬　初花　[illegible]

天下のおん[illegible]　[illegible]花
百[illegible]古[illegible]　[illegible]
[illegible]き[illegible]に[illegible]　[illegible]
[illegible]方より[illegible]為の[illegible]　[illegible]
[illegible]の戸口[illegible]る[illegible]板　[illegible]
上に[illegible]の[illegible]ふく[illegible]　而已
[illegible]の[illegible]も今[illegible]の秋　[illegible]

シ、 ハ裏ヨリ今モ見あくぬるまゝ 山リン
三ヵ月 ありあけの月 こあれいれ 言葉
神ハあれいすむも住るも陸ゝ 草ニ
九之教も 移りの 嶋 リン

力仙ハ云ヤ

□匠呂

匠呂 匠呂い坐玄才一去ヲき不易の白すゝ釈
足才 所友初識隠士義士おようて色ゝ白あり
天下会刃の茅茅の匠呂ニ名もあき老の匠呂の
ちく神あり間ゝ形 秀を踏むを拾ゝ笠形ゝ
松風ゝ一そゝ折る 悩苦むさおとゝて一天下
果ゝり住ゝもうあき老ゝて哀之 始
▲五老の歌い乃世の祇之ハニ云古の稲を子向むい
伝あき口さゝも今ゝ之の葉を見るニ匠悔懐旧
芝徙 釈迦の足ゝめもおく或い白鶴拳の方ニ
必子呂の泊を用ゝそい茅ゝ歌るおく泊之俗
出哀の泊を作るゝ百代過客あゝて俗あむむ

只寂翁を之とセよ白ニ句ニて二句ニてる引上
るゝ一折おゝえゝ白あゝ老中「神行
釈会乃才茅教生房俗四字余送字ま
古式ゝ遊あるあゝて苦ゝ住ゝ仙
冥途 罷科地狱の責悪鬼のさゝい怪ゝて
艾余之人ニより席ニよりて樗句を妻
あるあい匠呂のゝニ居ぬるゝ
拾 艾宿不老拓木の杖乃長 翁
大唐花峰 彫 未ておくゝ地の他 夕葉
若翠
宮 声矣一さ会仏少四ろ
十 ゝりニ至をゝけ一門の坊 ソウ
尺五寸 五 若生一仏の孫を抱一て 翁
九 ゝ尻ゝ会ゝ会の俗の声を明て 友五
四 仮ゝるゝ仏ゝ門のお時なのゝ 翁
四 段ニ生ゝられて冠る寂すゝ ウ
ム 自清き地ニ骨を埋る花の俗
悲尺 、 去ゝ生ゝて四く秀の一門 葉

白 笠ちやもちぬ岳も春の雨 芭蕉
白 ゝひねを起すむの陸奥 紅葉
白 花蓋庭供の公に扎おて 芙云
枯白 亡々を笑に陸奥や枯尾花 キ角
弱ち 陸奥さめて 落ぬる声 支考
茶 白 風の茶を垂てうのむ 沢色
法ア 五位すかと秋の夏ふをせるする 乙彩
初れ 土よむに集の本白の惜るし 千月
神 二方茶のるすに弥ーる 風 万り
彩 三ウ 多さーの仕合ひろき氣の雲 云来
ム尺 、陸よむ中も志のふ重昊 北云
引旨 只まぬ快のおくに戒名 考
庭、青天よちーゆくむの苔ー、 来
此老神氏氏医字八氏あり 已下大教記さす
、 伊や浪花を嘉の磯 鈴 桃リ
此年老 佐くみ々冬の日乃月 子サン
沼 ゆり街 風ー文る秋 風 千川

白 足花いおのつゝ寄る花微笑 法子
、 笑を結て 新蕨ゝ 徐枝
白 赤泥やあく 此乃の木芽 撥ゴ去
一 一 ひーき 蕨の 新 茶 蕨
ウ 雨 ゆの 月いゝ地をる死ア ソ雨
白 袖に今所のあるる花の枝 リン
、 島 奇く中に立東独ゝくゝ 嵐雪
向上仲を雪の 内本の リン
秀 三ウ 夜形の小袖 秀すする 風ア
忘 三ウ 忘ゝ子に 吟させておく月の 内 ん圭
白 外考ぬ 琴を 琴ーむ花の 沢 リン
、 茶 茶ーき 伝の 交 撫ル
り快 風月の 表の 紙をおーゝ 乙彩
、 智キ 多の 地 多ういみす 内考 木言
ム沢 ウ 杖 笠 仏 陸いる一 世の 夏 、
彩 ゝウ 彩ゝ 神の 光 ゝも 逐 彩さ 彩
白 乃 手のまうちぬ 花の下 吉

向殆す歌の教や　梅花　小枝
白　去も非う　伝つく　他　宿化
白　されい社松いひよう　鄭之て　百子
、　のくもそやすの　雲　林和
陵振　青柳　さぬ古枝や百ケ日　千川
、　又個他乃　蓑い　角紅　杉リン
引上旨　風敷そ人元　伝う分　、
菊　十二　時面も　哀く　リホ
、一周　さを含む　面の泥之　佐ホ
白　ちるひをめ　さ情む花蓋　リ
匂　月雪　れ　孤衣糸　許云
、三日　小ちの径の　ちる　リ中
白　又きく　の芳の境界　手
冬菊　枯庭　茶れ　れ　袋水
、七日　蕊の　る古きふ　リ水
初　菊り　時　おりひ　ソフ
教　おそ　きそ　検笠　依く

おおりの枝　めく寸歳去　石菓
白七夕も信　の芳　因む　杉風
、今の　れい　の茅尾　依
成　ふ　時　七回　武蔵
れさい木の　れ　千川
白　花　又笠　文考
菊の庭　花中　知おの　白あい門人
品又名称を　寸時除て　笑す云出る　あむ
信化庭　水仙の花　る　佛　支考
白匂　ひいき　と六　の素　杜坊
法子　多仏　ひ　流す　、
白　たく　雪　ア　小枝
、　手を拍て　庭を出る　伝ふ　芸生
冬の　鳥乃夕　れ　ウ中
白　梅の　の称る　船　夕市
、　風乃　ふ　茅の　天去
冬の　す　り行　イ次

白門春のもとほ世をまれて　孤生
、人も陶ちて糸も陶ちて　ま
春一夜林うぐいすくれぬ　万る
雪をひけば月の出　八宗
引上白　移延形種子もの　る
、冬州やのれの隠を思う　水青
みいまれのうきの方　揚東
春日　仏を鳥のあの旅をおく　昨古
引上　林式世もも吹沙る　深之
白を引き宮家おるも俳高れて自業を
みい枯て俳るおおく石沙　対夕
月い春りと水るを　キ邑
引上　徳垂山人もまれて面り　波色
云出せも起てつくわふ大徳　李お
、艾きさきの旅まる　陳青
引上　花い旅陶る就的の春山　方泥
、あちうき世を号とあく　去水

吳　白吳の実面ふき形種　何史
、　厚舟い芙之　伊風　和　孝
氏葉七余老中の曲名挙之　秋老葉る時
も白掘ホもめ氏老ぐ　拾之
タリ　いさよひや沙の新去て方り　白和
支考名　変化の時を吉うあ　丁　右範
白花性をやめて花之の孫之吏　東羽
只吳仲の曲と支考ナ名あ　吏を度て沢を芳山
ユ陸寸ドんを陶朱ユ沢ぐ
、　廉の考ユ云の法　入月　秋　侵者
之秋るもあ寸之秋るもあ寸　酸皮
白古人ユやくの白和をある花の付　巴兮
、　杜丹去陸　名の粉子尾　牧竜
梅芳　艾梅もちるロ　あり一七　君仲
斉悼　陸ふユ形るまの　仲七
白糸墨の柳もくもるまの　、
、小田乃陸もあくもろの子　子詩

負　新蕨の点さしくらぶ　維明
尚白峰　山葵の芳洞々へり　幸庵
白花をよの賀ュ拾へと出れ多　、
、　新ら布や冠すの拾ものき　水花
名いあ明の和乃拾大　若生
白人とも初信風の陰乃花　仙郭
、　月ュ又えぬ秋月ュ又ておぶ　田入
行仮宜あら文月の月　袁立
白仍井むい白きを陰ュする　条次
、　十宜ら寺　ろりの嘲　重
十七向　艾人の伐打詠を花乃琴　致面
寺角忌　六子余日ら寺房る水　陵く
白むそ昔今又京の寺ら み　孫舎
、　花をろろも席枝の名　大主
八年　ちれと梅名い来代ュ加ちく　葉雪
垂佐用　菱と杉菜の元俳てめれ　佐里
ム祝　あちと侍せ曲明のあめ色のむ　ろり

あつらく ち社ュ新て春のむ　深風
、　ちまもをしも今日いる　風楽
艾湯　稍迫を冬忘り苏梅花　湯陽
七里三向　加乃ちれらる義の号　業ま
ム　ウ姫らあひて明く死らる　以拾
白ムもきい湯ュもしのむくを界　、
、　ねまんの寿の雪も彩ム　巴形
、　涅槃忌の地菜も五十義ぶ　義井
新菜の曲実ュ永き一附　ま
ム祝　ム雪琴ら月ま老ュ乳のも衣　一字
白三ム山芳ュもしの　ナ尼し　ま
、　名い雪井ュま若の雪く竹　始家
崑七風ま云ムを医て
名崖　雪く雪の地も空の花ゆ ぶ　和芳
性も去ゆらく寿の入お　十知
白ちる花の崖ュもも法の声　風楽
、　去の名待ま友も考ら　只白

星月 泊る宣や少斗の星月秋 茶松
き角花三 柱あく白い えさら信 松何
白 裏一乃を咲て ふ乃む 松探
、 花をうそへて 拘杞の実数 千柄
ミめ 俤や蓬茶ふく 云ん尾 梅尾
ヤハ岬 残る居士衣も 去の出悔 餐月
白 方のまひこる 懐 恨 月
七 号やつ〳〵 松も ゐの号 杏ゐ
茶烟止一 去の 雑 衣 め風
白 実を去ふ一木千里の 春のむ 竹壹
白 尾ゆく 茶ゆ初 苦の花 三徒
時 多より 為すま 考のわ 祝〳〵
引上白 信 花の花の力も 失ひて 祝信
〈巨 昔 白 あき 俤
り状 風を 面て 拾ふ 恨のちり 訪面
コハ百 初ゐや 俤の 茅 問 把む 許云
小ラ 榜よとる 舟のあや あく ふ考 東智

冬著 遠の孔て久のある 系を五六十 り合
、 くゝとそ忘 月天十二て 杉風
夕良 白や英 俤 著 房の泉 多 俤〳〵
白ゐ 丈 月 や 付 面て 更 一 昔 小枝
號び こそ萩や人のくるく むさく 寸 格
、 多 ま れ風の芸 技 化 本 ち 岷 年
、 手 向 と 葉の白乃 吹 多 〳〵 木十
杖郎 亡 記 俤 化 てきう む 杖の風 客庫
コハ只一 老 あれ ゐ 白あ〳〵れ白を 暑 ま る 教 老
西了の 時 技 中 て す る 西 と 式 ゐ も 俤 多 〳〵

□人倫と人伝墨 ゐ ゐ ゐ る 西

東京 昔の 祇 社 も 今の 仏 社 も お 哉の 詫 乃
吟 ゐ 西 め い 姿 俤 の 二 ゐ 社 今 ら さ る 加 く
▲去姫の 如 詫 く 苦 つ く 姿 俤 体 用 の ゐ を て
万 法 一 理 の 法 式 を 宣 さ る こ ゐ る の 左 世 る も 赤 三
伝 の 孔 生 ゐ ゐ む 代 歌 あ り つ く 作 家 另 〳〵 り

まゝ中ゝも人倫ハ是い仮令ハ面ゝ風俗といふとも
又ハ国ゝの情ゝより記者又ハ物の用ゝ能て人の指
さ多き者あれいハ白白ある〳〵人倫ハ白白ある〳〵
とゝ云ふ事あ之ゝり人倫を二白去と定ゝるハ一」又
母ハ男女ハ目五存ちてゝる文字の釣い或い自他の
情ゝ分ち或い姿情の連を考て打載の付んとお
あゝ人倫ハ仮令ハ仮面ふゝる一生の死い変ゝ易ゝむ
▲記者区乗ゝ又母の上「」ゝあゝ南白文ゝて初んゝ
翁ゝゝれいかゝ入代て記すか又ゝ人倫ハ人の指
人倫ハ只ハ人ゝ事ゝて二去の人倫あゝす今
是を人倫ハ姿情用の五ゝ分て下ゝ言す
以陰の云いハ已下の人ゝ仮令仮面ゝる事
ゝても対孔の変あゝお載を設セとの謂ゝ
独ゝ古物の指ゝ主推刃独嫌ハ教い只人倫ハ
人倫と定ゝ寸以ゝ法制の変極を考ゝ
▲以五教いえゝり字ハ人倫の属字あゝ所ゝ古

式い人倫と定ゝを蒐ゝて紀お教理を設て
仮ゝハと号て人倫載を設ゝ寸法の実
あゝ者を指ゝる者法あゝる故ゝ

建白男女

〈人倫二去〉

父母男女　以ハ人倫凡仮ゝ以教ハ二白ゝて去ゝ
▲以教ハ教子ハ父　妖聲　男姑　祖父母　孫姪
伯父伯母　甥姪　義母　本の六親九族の文字ゝ
是ゝ傍名俗名記ゝ作ゝ支名ハを准ず以准
するお中ゝ載ゝ嫌おもあれい准仮ゝ文ゝ
蕉門ゝ人倫二去ハ古式ゝ教ず白面ゝ人の働
の有云ゝ指ず只教字を嫌ゝのゝそゝゝれ
六親九族の字教い五ゝ月五年ゝゝ所ゝ

〈人倫ハ載不嫌〉

主推身独嫌　以五ハ人倫ゝ指合ヲ凡ハカラス
▲ハ古式の文白を仮て蕉門ゝ以教い号と号て
載不嫌ハ主を述ゝる文ゝ以文簡古事所ゝ

古来只氏姓字のミ人位とせぬもとんぬ連氏五
字ハ数子の名数を合るゆを考て七部の
位ハも家ハ人位載ゆて詞て自も昔の甘句を
恨めり今是を補一更部を分て注句をあつ
人ゝ乃多の逐字を払て明らゆ考セよ
主ハ和をそとる人の例ハ上ゆ一字ゝ君関白殆
云改外ホの友名傍友名大名参内代友教
神主ハ名主何ハ教又帝仙間新院表宮
宮方公家方及ハ中ハ参局奥御内字
後家方文位ハ西堂納所院居住及居ホの
居ホ名ハ又然名ハ法治ホの姓名ハ古人名ホ
推ハ男女を分ゆ仏ゝ他ハ人ハ例字ゝ義光義例
尼人ハ人ハ人ハ例人教客友仲乃是庵達同士
主付乃ハ字名也邪ハ名ハ先生考ハ歴ゝ歴ハ
民乃姓殆奴工雅教味方伴文許ハ工ホ教ゝ
身ハ自を考ハ例字ゝ我已某私拙、文ハ自

刃其氏方ホ教ゝ新法ハも氏中ハ人
独ハ人数を考ハ例字ゝ一人二人受人何将軍
多勢聚集屯壁庵生ホ教ゝ
媒ハ然義ゆ号乃名の例字ゝ仏陀医陀恵陀
仏陀教仏好候好何毋教条夷弥夷教宴友
苦友教法持皆持教曲志乃禁志教大工ホ拙
友乃仏日用法蔵名義ホ三法師乃策大義翁
法義を志教六新叡れ乃人教り仏条後生教教
宮司社勢祢宜教武士侍小性供を出代新条
代書及腰元教使部雑色乃小使田ホ雪舟
六尺教上ゆ下ゆ上戸下戸会子乃食稲多ゆ乃引
乃士教大力英勇何房教何家何ゆ教頭博
太郎持を教拙て教り氏教法句多乃ゝも
一例ゆてあく。下ハ人位・下ハ時句及を出ゆ時ゝ
京氏天王天女帝仙間新院鬼仏氏教古式ニ
色々例アレ氏人位ニハ二句ゆて去ヘキゝ

▲只上文を自信なき連歌いと支考説生の説を示す

全 キミ 印

出生の孫文君の君 保き 小枝
待う袴いやうやうとるおき ソラ
初花の万葉因る時あれや 蓉
君代の俳もおすす風の神 壹平
四文字ある可のおやゝぬ リ和
桃 宴ひれい嫁もきれむをれよ来て 桃因

たるく日も石の井掘る天竺 法風
彩ある宮う法花もむ声 蓉
拾 佐 勅よ来て六位国ようし ソ英
友 印 ちの餞よて笠うりてふく 享子
十重共へむの張ある色乃庭 コセム
抜菜一房を分る里人 蓉
あ、皮の系しほやるゝむ 壹芳
木たくあうの寄れタくれ 風麦
実花を入セむと人の孕て 蓉
祖父のち刀をうすゝ乃う 格士

乾 青巳伏屋は生る名のうさも 風楽
、 長アたとうるの稲 駿士
、 口てい笑はくれ佐アたれ 和
桃 うも云も庭のある拾ふ痛く 臣
むり屋風うち庭の抑的 葵的
初まは世界の釈子拾はて 蓉
炭 佐友 又はるもすまぬ信人 ヤハ
佐下の用佐を送る花歩臣 蓉
妻るの古ミは房ぬあ奈母 庭フ
白扇 大名 あのふり独は咲てあ身 吾仲
一宿て五石佐くのお大名 去来
きやるも小指をそ手掬の茶て 六之
文月 麦杖あれもうるる風 逸飯
なり 出るゆい拾く来けもとゝ 東和
西りの寄い村るその月 八宗
木方の旅芭は佐い秋そた 松壹
代友 代友の杖をいうこと宣へた 支考

一稿 ヰ之

神之の水くむ吉野の宮人 立志
上巻志る一り死人見る 信風
母歌の利口あと先とけ 志

雑 ヤウ之

月よみの光ひ皆なく 明方及
手をたゝき聲をたつめる 山リン
ゐもを神も咎すに 笠 明方及
月の宿事之重 お出よ 義

ヒ子 ミヲ之

折る舟乃底作り 杏皆
庚人の志れぬ河よ 千川
陵も白髮を作るひ 松後
イン

柰

れうよ鶴の文すゑ 寄九
頃ナの石をナ・まて おさそ 義

神より祝宜のさひ居るも 松風
あ一りの山家あれとそく什 ま瞞
、 花山の陵も振いろん リン
布せいるく大塔の宮 岷中
宮 猿花

家うまの相ゑ口のくるゝ之 寺柴

るるも千お花 花翠の花 致由
五柴よ有うす竹の中乃 義
月くもる雪のよ相のすさけて 叩タ
四のむ嫌のいうよ久しき 相柴
鳥接をよ多る姫の叫れて 理敏

萱 ヒ系

ち系てい多うて田四 白松
四芳の度いい意必ずさくの多 古之
岩 ヒ

老傳の速よりもの お木さ 嘉平
四て見れいそ材ゑ赤 リ和
笠 ヒヤ

庚庚を庚用集を借よやり 茅花
大工の長さ去の後さ 草二
茗山 ヒ部

生代もあれのとのと意もくれ 和
後を捉くる意就の陽さよ 平
四も彩よ美代の赤ね叫れて 琴舟
とこの使う白も 笑 す
杉 ヒ位

久月の草よ後位も 花洲陽れ 和
ヒ位 ヒ石

陽居い陳ホ麦の杖中 陽之

桃

お流の淫を立うと学連　為冥
格のふしんと思むい事乃　冥五
見の長二寸伸おもひもち常　仙芝
解をやめ時代り〜下き　杖色
汁店と花だのみそろそ　麻面

新
花次

ほれおき変せと反を新　キ凡
人あまくまえおきうつき乃　扇水
四ちいさむ金山う　旧　朱弦

姓

まちて赤阪加る　大井　反　集加

枯、

きり〜あるる乃　姓の弓　キ角
日のさよん宝る　淫構　ち　慨士

古

高　辛付く　義　陸の像　英会

陶

白猫と萩と墓をおり返て　め凡
陸の曹子と花おをちゑ　知豆

、

柳老ゑ〜〜柳凡ろ〜〜　侍素

言白

白〜と言寺　言の白〜と　扇
嫁入わり出すちの探干　二川

言白　傳　古式ニ人位十ラストイ（庇指合ヨクル凡（キく
▲傍い仏老のあ名そて人字と教すれい呼あるちい
知ク古式を拒めむとひるそて千と支考の池を
ひくさ〜い傍名も呼とすきを人位と教セ〜い
宝門義受ド時い卒立て四和ゐる凡之

誰　タレ

西花

焼捨のうるこい誰も袖めれて　支考
白髪ちりの庵の尾の阪り　雪絵
ん走る併のうめう嫁ちあ　一介
新乃涙のひんと尻声　イ吹
弟中へ新そて二年ありて　リ凡
年のいびきをのそくお俳　黒芝

桃

新

老

サル

奥の背去ちふるこの老と入て　新
行人入し小口門の淫　去来
立ちり屏風を倚す女子と　凡北
男あき姉う竿をちうて　口通
但大柳と侠帝を本す　新
老めれい汁のこすの背ろる　友五

二元

、

ヤヘ

長老

度のぶまる廿ぶ方ニそふ好去
嘴をつくたぶ拂ふ虎つきて示右
且那拂のひろき長老和及

オ

長

住うくて住拂ちこぬ彼ち子サン
ちこ〳〵とある陰風のあ杉風
美豊ニおおり拾せて仮拂桃リン
陽ちをんとも繋ち角かれリ和

ツノモ

尼

陳お大ニの末ニ追尼岩芝
尼ちももニ短尺分ちんか山陰
木廊の陰乃人の節さ反由

人

タソ

ニ子供ちもも一芝居ある山リン
子供ちもも一芝居ある末拾

ウト

郭

因人を拾て休る新月拾
萩さ一出す長うみて合ネト
同一付秀ニ赤ニ久を付て似去

笠

一茶流りへて和尚の長性渕山
出付ておくこそのねうち茶柳

ト

田を植る時い屋人さ一合 安由

テ

臣人も速ニさそふ糸宮ソラ

ヒナ

九ちニ拂て中ちくしき拂ち
おの沢一ろ母のそるさ木因

、

敗ニちろ対人の使いろめき ウ

一拂

一拂の奏法ろつけちる 和
拂ロニ臣ニむとそふ悪い徒キ角

、杜

不柏子ふお人ニ佑さひろ ロ
拂の杖をちそ ロ逆和荊
菓子やりて孫ニ和つる子供尼 舜菓
、拾人の小去い拂き立ちれや十ふ

初茶

枯地ニ灯拂一拂月呉天
西ぱい笠焼やちまきけて風茶

浪

ロ戸陸又浪やちれ出て柳士
尼ちふの又えぬふろ柳ソ杜
町人の武士と出合ちく逸正
ちい下地をいなす分ろ ロカ

弱
客
友
雑

逢きロニ出て志やゞの止る　佑ホ
家のおれいねてくすし　嵐竹
阿原の体をもつすゝ友逢　芒風
口付もくふ其まゝの神詣　岩翁
果報のつくをもゝ彫の孝　ま百

椙ニふゝ〜おの木より　住峰
俳諧
各峯
天名の梓の杖い一系ち　乙孝
各むおのちき　峯
毋方ニ敢て月のわさひ　言芝
鼠のしもる老行の中　泉伶
朋岑
みむ
朋ハイ
朋岑の髪を猪あつ西のる　猿牧
仲万
仲万こ猪む坊の狩猟さ　杏ふ
水仙
ハ月もきゝく山の秀しめ　青弦
大串をぬ教い蛸と麦お　ヤハ
阿方ちを名みて出ぐび　逢支
笠
おおのゝ手い内交の糸汲　リ和
阿佐の逢も中の点円士　調山
逢四三

六行
元
元
傍
帛
トギ
さミ
名月
笠
ロ月
傍ン
三臣
ケイ
三匹

扱つ云つ毋の云交の二つお　胡仙
言乗い止ニ孫の云を　以全
江戸立とか坊の元を少合　風伶
杖をゝる刃とおよゝし傍　号形
文る祝弦実彼る林の角　ソラ
為のお仏の位ふゝる月　弱
奪反とふ形ゝん玉芋お　祝桂
位語もあん仮の上逢　所ぶ
結逢もを付ゝ名出　一字
セもん杖ゝ孫のお麦　壹平
あゝまゝ先〜形伝の落て来る　逢支
ゝふの丘形いおめぬ号　茎二
夕丸や伝栗の陵も程傍京　底言
焦〜ゝる角言ふ牧を火　和伝
生立もゝこん摂ニ麻て　和
ゝく　殘湖あゝゝいひと麻ゝ　麦ホ
猫の子を笑ニ文の出ちし　キ子

身

●刃独

小ぬのうるゝ嫁くの舟　杜若
舟竹
孤きすとして旅に住める　嵐雪
人の佐取くうるる一枝　秀和
月花をさすれ君ら髪指　多及
コヒキミ
夕々　秦荃の面もて咲乃間　紙水
シ、
門まつゝ薬子下さるゝ　所考
京ーんぞに赤き花るお
石地　女京のま苗もふ乃姓　羽
印　和の月国なに赤ぞをやす拵　享子
カタキ　対ぬ故の車図いうき杖　コセム
突在表へも合点する君　家隅
壹　さおくても痛恵の恵こ衣　ふ丸
丁独　性さくれんいちのふ丁独　莫之
去家尻火花の傍く考対す
天下を平穀性さふえ　欣只
吹矢角たえて　ぬのおりせい　長水
奴
尻も結もぬ伯母の云仕　水胡

独

文月
巳
かまもさにおけい痛も独為　枕二
猫と已とうるまの脇次に小
同ーみ老の咲乃あくくて　枕リン
炭　欣されて又莉幼やに付　ヤハ
ふ拭に前みてんを垂て足る　リ牛
手お去の松も足えぬ面の妖　ハ
、　めつさに風のまやる垂る　リ合
青くの月をうまちて旅大工　依く
カケ　義わも笠きて去れぬひち曲　衰来
天月　秋更のゝみの去に乱る　性人
足人の佐も何やら明云　山朴
教免にもれて独る月　羽
独人　きぬくい秋ふくも同ーちみ子　呂丸
秋ふ　宿の如乃如きあけ　ソラ
イスス　我人臣をちすを乞　フ転
独　国の秋い移次の接き焼松　仙化
子い杖にみる老の小仮　キ角

蝶

仲人ニ少ニちりめんもめん
十枚ニい恵と云名のち糸
四町ゆりの名さく伊達巻
郭。炒ニ吹くの冥を呼けも
十人ぢニ余ら次めーー
文育 仮防 金屏ニお防のふ仮を移ー
刃の美代をぞニ移白く
拾 防白を屋す畑の去多
ふ云れも加ぬ紙防ぎむ
、 紙ぜ〜白寺塗防の此母
、 茶碗を除て多ニ小茶漬
笠 梅のみニ姫の袖をあ家う
、 左知ら医防のふんをれおて
枯 行町出うす畑 移 田
仮好 ちさーの仕合ワき書の去
他 保母の左を初ら去の弓
糸ふカニメる出ワう
イ拾

あヤい祇そ〜宏ニ白出て 末
草移の枝うぎあふ姫蝶 草
ち防ニそちとるさろ紙 李夕
上方て見う紙ぜ〜や〜ふ老好 呉天
けるうけ〜さ上の紙ま七む 墨文
白仙 乃呉ちあうて扶合振四 天窯
、 弾好乃う等ニう屋〜う 文
後味の女。序の角ニ母乃角 白陀
幾戸白社向まて来ら 以之
舞 仮美ち枝のあ仏常ん 麦士
仮美 佑美ち枝のあ仏常ん 貿由
振ニう供を祇之の祝ん 茸二
笠 西ニあうて常ちりあく 広山
、 糸美ニ花の紙ち乳のつま キ角
仮夜 生て世ニ方後ニる老角が 宏宮
街 ちと吉糸乃情ニ〜む 角
、 花ちニ支姫出ニ乃花盛
分ニちニく姫の仕合り牛

炭 何おき

[illegible]人寄りと種とを蒔こむ　松りン
種おきもりの夜る夕月　ヤハ
長みてお者やら母えいろ食　花丁
笠 何太

性とをもて作ともろ　寺平
出代とふのふ町いあんまちや　苔二
九代目のろ[illegible]ろと立て杖の肌　麦士
とる度乃姫も菖蒲の神　以之
天向 イ太

医者屋の嘆もあるまの元ろり　巴野
ろまきろあれい姫の　清ろ云　平
笠 大ユ

屋れぬ日も回と入と寄　直支
屋根を先宮りい大工屋ます之　二
二三反 親の代ろ　作 取　王人
桂十 木キ

嘆ろ日まも四ろ精進　二
平せも木挽の孫のもまそ　拍鼓
屋根 ヤまシ

屋根茨のろい宮ろ元を今　東吾
嘆ろきもろ皆掛ろ　栗毋
長ろ一安ろきろと畏り　紀白

日用 [illegible]書と日屋掛ま見次て　コ屋
炭

月の屋ろ[illegible]に扉の門　キ角
根文ろまの大神も落ま斗之　、
角カひろきの神もま方　松波
地 ち待

屋のて茅葺ろ触　伊　面行
繋ま使さろ[illegible]ろ[illegible]ろ[illegible]ろ[illegible]ろ　芳水
壬 何拵

大内と井戸拵をま杖のろ　一相
地表と新ふ松乃下表　乍木
乃ろと母のまろ文をろ　乃家
川一ワ屋て武士ろ入交　吏今
白刃 ごまり

何とつけても　伊乃熟和　元士
面ろりをさて章と長ぶも　萩人
山者の嫁のとろて子供を　芝船
納ふの病を足てをろ　除風
三日 お本拵

詰ておるおを矢止ろ　蔡拵　林角
五ヲイ

乃家乃姿もろいうあく　木因
ヒナ

村ろまを大と長ろ　斜表

吐き〳〵ひ・師の乃乃面白や　はな節
金おく・摺の美えい花吹て　風曲
若もをひて仕ふ献を　型素
吟れて大黒・菊乃拍子ぬけ　ソ寸
生るゝや声も恒は男の子　キ角
元ちしゝるる・新乃の　風玉
元良・まいの手拍て拍子ぬけ　横九
六〇・新の宿をうきぬ不し　り寸
桂十　型昊三千鶏うまる渓の月　茎二
唐・人うゝの鶏をゝき　伯楓
ムツ　唐州は新も松てゐる吹れま　沾蕉
宮の役は常る月の秋　兎谷
思夫・是は思一と古皮篭　芳俳
おり　おり夜ぬ形星ゝる　因入
負　月い今待て谷乃　松　柊
いめる伯父乃は尾の横秀　り角
ひん　菖蒲の枕は菖蒲乃ん　宰旭
生俳

五相　涼ト
り和
千桜
新汁
お鶯
伯楓
有梁
七寸
茎二
鶯
お巻
仙化
久我

い新　新ん は仕て地を荒次身
尾恵の拾ふ子供連ろ
仕茶　茶汁・茶の今ゝ夕まれ
松　花々〳〵の咲て知れる畑乃
犬も足知てゐる番・振
桂十　後生・新ゝ之ゝ雪ゝる
瓜角の書社代は乃月
鶯ゝんゝその雪・卑
草　社既て寿もまある祝・辰
文出て孫の仕ゝ和ゝ
手見ゝそゝふ祖母の友達
言子・賀年一日二日お乃
髪の結目乃留き寿尺
ムツ　髪を根ゝと武ゝ武ゝ
ゝ　ゝとゝる武ゝ
付　ゝとゝる付・京の和以
ゝ　ゝ稚ゝ和ゝ軍也
十五　あのゝ・いゝる角ゝ俳ゝ

ヨシエ
柏　縛・えろ尻たく肉　猪　岩菊
おもはきつき懸想のまゝて　徹士
おかりのおうう菊ふ十余　集加
ながこ
寿　雪ふ代季もお例を・ふ　りお
まにさくいろまて州と学ゝゝ　冠那
聲いさくふもひふる　左角
お客の傳ふ二きま灯の明　り吉
仰ゝゝ後のうゝとあゝ　お誓
柿　幾　出代も列液の花乃吹拾　呂杯
ヤメ　義人ふ出る若宴お紫　久我
ムツ　見をとう陳炮知い多粉て　松リン
子・佐の明の学四平博　東俗
使　戻ゝといゝゝ使の未見てす　逢支
天河　吉白をよゝゝ麦のゝ町　三位
伯・毋あゝゝ始あれいもの吉れ　有梁
ヒロ　柳・柳ふまあお赤ふをやる　山俗
柳　京良をて信花く後の十三歩　名白

ヒ十
ヲヒ
山仮
三月

弱乃麻のひんと尻ア　イ吹
は盛て孫ふ吸同拾さヤ　世ふ
和田・秋又も独芳・紫　深紫
ヲヒの末て紅をあ下ふ　芳
水仮ゝ末て考ゝ仮附　吉天
志ふ吉ふ人ふさ孫　友松
因ゝ　い凡ねゝてみる　李夕
化粉ゝゝ乃ふい足ふる蛇の花　六芝
彼ふの笠人夕某所を　胡酒
ヒ仕ゝゝ山おふ麻く汗仮豆　乍才
ふい廿・左ゝ乃ヒうて豊　木十
ヒ花　おおの廊のすゝきやうまあ　多乃
六人　ヒの椅てぬ医者の六人　栄芳
乃灯ふ極ゝ蛇きえ医てセ　東和
山夕　ゝゝてみる左空の中　栗几
カヒキ　芝・鼻もかへぬ合点のお行　右菊
ヒ午　いゝ作ても行いよ　支考

仰

甲の言ふは已に見ぬ見時して　丹波
屋もれ武士の二人生とも　丹波
ちつ小さ者下手と仕もう　地獄
陽の山乃生る日もぢのきりむし　東和
そぼろひきの我ぢあるも　六之

ナラ

付合も居　上戸まで呑ひ　嵐業
さくり〳〵とあれやるく　伝水
聞て和尚を礼はあるる　酒屋
下戸を酒めるる雪秋の多　力弓

上戸

智

男後の柿を我ぢはたとくり　義
娘ちぬ娘の眉うでのる　ソほ

又さとあ〳〵ぢ娘ようし　ヤハ
ちとちと大酒ものの〳〵　コ反
ちぢのぬむ状のあと失　リ牛

炭

ムキ

持う手へて素の髪そう　松傳
因秋あ〳〵日い盗の美昏　才丸
ち食ちる世いわちぬ月の張　峯白

孫

コミキ

上戸

其伝

仏壇の茶漬来る恒の声　雪
をき寺ぢ居も浮乃　松
ちる士をきう意つき井戸の殖　生

上戸

月数の髪を性ちみ生〳〵　許去
大灯して居あてちる。伝達　義
神田祭ち生す　足。弟　キ角
月ち寺る利反鞘改の改付　フ船
和尚もへちる裡門の素　仏化
ちう山素反ちふれてう　生れ
木戸ち中ち和尚の立ぢの　正風
絮の仏乃とく焼因　浜角

尾張ち方し坊子虎の平　斗加
歯をみく横殺の先乃時　伝言
叶くの花ちちのちすん　寿門

、

仏ち

猫あち舟ちきあふ反ち　村コ
寿ちちきもや忘ぢの殺　乃果

士

子。仏ほう伝ふる所を学て　羽

△人位字美仲三用ゐる載不煩

祈。松の位より侍　十二　歌　仏り

舟うゝそよく　器乃萩の花　ホ乃

蛾。略乃人を位セて我も　仏　涼ト

△人位載ス仏忌仏天人載不煩

[illegible] 昔より唱式も部載を宝子仏と忌の載

ゝ仮令人位ゆ位ゆ人位の振い煩ふべきゝ

▲人位載ス人位ゆ位ゆ煩況や世界美ゆる

忌天女仏人の載を年ゆ煩ふ一り仏者子乃

ときい為の人ゆれゆ古人と歌新ニ入る所ゆ

人位と寺古今抄ゆい字ゆるゆ宮ゆて宝乃

支考の付句ゆも煩ゆゆ中ゆ

ろゆゆ乃尤の姿も美の外　羽

さゆ比

仏　まゆみゆゆとゆを行く風乃　立ホ

布袋ゆほ羽井の化身ゆ　羽

年ゆ号ゆゆひゆとゆゆゆゆ　ホ仏

冬至

、

本孫ゆゆ果ぬ用ゆぬとゆ　如月

汐む仏乃丈日をつく　忌

李ゆゆぽ乃時雑ゆゆ　載人

ひき

、

陽ゆやゆゆるゆと立ホ　カラ

文保のゆゆも栗拾ゆぐゆ　人

姫ゆ初の白てゆん　ゆく　茸二

姫　祖母ゆ鬼

ゆゆも虎つゆぬ除ゆゆ　りゆ

忌いるゆゆゆ柳ゆゆゆゆ　在支

今のゆゆ世ゆ忌ゆゆゆぬ　涼ト

要ゆ　宙

医ゆれて医矢ゆ　昨ゆ

あの男ゆゆ乃ん母。新　栗之

仙　神ゆゆ仏世ゆゆ姿ゆゆゆ　羽

多

茜を去ゆる乃ゆ仏　、

仲。孫ゆ宗仏の細代ゆ　ゆ枝

△姿情用の之仏ゆも不煩

姿ス支付門の字載ゆ五郎中の名如及病名

ホも比新ニ人ゆ下ニ使句あり

情ト人ニ云フ字の訓をいふ云ふの字なし
清白ハ已下 英雄豪傑ニ成ル腕不ニ有
用ト人 無義をいふ男女伝係の行をいふ
汝ハ清ニ用テ云ふつの字なし
右之ハ多用あれ乃白おきニ清て
吉凶の法ハ今初人のおとすカ仏ニ おとす
人人 佐人名 ウ人佐 ス多 ナ情 用 無義
一行ニ二三字ハ上より次ス
ス人 用乃 勇ナ 外ニ 高ニ 仏ニ
ウ 誰やとも云る 笠のさ人名
ウ用 乃ハ乃ハ ニ乃 ハ高 テ
所の家をふるふ 赤ふ
新ナ人の神 乃 白おき
用 日のちり〜ニ 地ニ 系ニ
ウ 我 ハ清ニ 名 あ
ス用ス 髮生 乃 用 男ふ 乃
ナス甲 仏のつし と 氣 を 後 性

生
性

用 汝ハそとそるすこくと向
ウ用 新法の焚ニ〜く大を焚て
ウ 赤〜ハ炎ニ乃ハ〜〜〜家
ウ名 田中ふるふ乃ふ 柿 焚る 法
用ウス 高ニ 舟ハ人 人ちんもち
用 英雄を 横ニ 脚る 月 神
用 麻さ〜き 町ニ おりみる
ウ用 二の尼ニ 王 赤の 花乃 黒 良
ス用 情ハ 春ニ ちり 使る 尼
右一行の中人名多き白ハ 兵二百ニ 九力仏ニ 人佐
十より 多きハ〜 さて 芳 称 ハ下の五外 人中
二玄の 形 制 ハ 尼 屋 髮 を 那 乃 英 体ニ
初ハニ三 変 ハ 乃 ニ 後ニ 後〜 西 の 法 ハ
英 変 敗ニ 定 式ニ 初〜 彼 一 流ニ 乃 き く ハ 用
乃 西 字 西ハ 情 ハ 皆 人 位ニ 乃 り そ 偏 字 乃
美の不 ハ 多 る 乃 ニ 又 法 門 ハ 唱ニ 人 位 を お
偶ニ り 髮 ハ 新 を 跡ニ 古 ニ 変ニ

△人は一人幾不廻　慣言
郭乃　郭おくるも一人なり　キ角
侍てる月の大般若かな　潘川
はの毛を人知れぬ実に　台太
庭人のかくも出代るんやら　水胡
尻も結もあをきの云伝　根二
かまもすまおりて森も一人居

文目

△二人は二人　二去
花は二人見人あぬい目元　星冬
二人郭乃　侍て　ウ中

七夕

△人青河もう二去
社切て役の人見結ぶて　呂風
義をもあれすん人をお　林和
知れ弟をもむ人を見て　南木
降人とある祝の九月五ア、

砧

△人日河　三去　カ三ロ五　八
ろの見て結ま人　ヒ　孤内

夜寒

拾

ろくに四る牛も人ようくも　弱
蒜もう当はまく人を見ぬも　文茶
花さくを抜すく人も知らう　去朱
人の時々空乃分の　丈和
人月祝は足所いあ　先之
換都て多田も寄る人の声　孤水
茶五本人ろろ　嵐シ
金ろくも人も　除風
たくい　人を　支考
歌をうあて人も　水南
きく人あしびをき　反止
あれて末多いあぬ老人　尼把
ままもつ今客人　白茶
什指て月歌をかむる人通　小枝
一月出て森れやきい孫人　乃子
清交の侍々越あ乃人　る岐
小独ろく人いきる忍入、

一

二

三日

秋日

九月

岩

人の姓よりく　紫雲　嵐雪
秋ふかしと人ゝ呼れても　秀和
ゆくそうゝ人　天窮のまれ　雪
ものまうもの人ゝ　和
あもしのうさを人のよの中　舟竹

△文毋云之　二去

さゝ合おゝ云て伯母招　友梅
柳をよくむ乳母ゝ終程　一瓦
ものまゝ毋歌の乳乃書却　一扇

△子　二去　京雲

扶も子供よ仕ゝ　扶　不撤
雅子の遠来ゝ乃を片付て　不玉
ぶりゝゝきの子姉ゝ　玉文
とあて食を居る所を子　山り
ゝ法てもを寄雅の甘る者　青吹
遠見ゝ子供ゝ乃吳あゝ　里白
甘子者の中ゝ　徳竹　方徳

花　除枕
面吹て捨ゝあゝ　表士
△非人佐名ト人名　人名越不姫
風の外を甘高ゝ仕ゝ　義
徳や表ゝ室のさんも　ヤ水
あゝの乳ゝ乃ゝ　力弓
山吹や雲徳乃挑衣　友白
脇を栽乃　肌扶ま厳　キ角
子孫ゝ病夕方や扶ゝ甘ゝ
云孫ゝ孫秋世乘ゝ音白　乃子
花の吹ゝを乃ゝ室　八栄
西門の勇ゝ　牧青

△吳人名　二去　カ子

古代の名を云て勇白の人の侍ゝ字さて
ゝ白毎ゝあゝ人ゝ　夫世夫人の名をさて
何の一二句ゝ乃ゝ
▲武二句庶力何の子　古人の名ゝ人ゝさゝ乃ゝ

付る所より紙を取出と題名ある作あり之れ
若くるまきるまきる清るそ者ちし

宗堅のんよくもあん 去 仙去
一之屋
世のきそ之 宗志西乃時与 義
美人も考きそ之 教改の事 コ及
妓王ちをこ事みこれて二号院
、
炭
麦々の笛や布袋の夕除 高川
春花 弥一人を あ〜我志の中 仙角
相伴乃あんて 弁 文 行基
一休の状と新の考あるる キウム
一匹
家上を書ちと伏尾の夏 山夕
小弓 歴義の初よ おろ〜月の恋 岩義
教経と敦盛と歴史四る 北声 キ角
焦
登竜門の下拵のおを面れて 栄弘
孔明の刀を く 麻の角 文学
孔中ちすす 国因ら係 角
△同仲古人名 西去

冬 風俗
去 、
哉 仙
イセ 美女
随 、
奏 俗
負 仙
八夕 去

去ち宗紙の名を付しあ ト玉
日本乃事自ら坊と月を見て 之五
秋孔和名ま ちる 比菜
伊弱ら新もあって系いおく ヤ水
月花を墨之保ら妓と妓女 ナ千
菜の日乃坊美姫の名と陪乳て 茂秋
俗も坊美姫の俗ら ち 陪加
ふ之を いと ふを そいよう 夜谷
ち と 家菜い おうう 千柳
花の中 義美の ち乃七ふ しき 支角
花の張 達十人の ふと何もあ 不玉
苦の下ら 出山乃 秋世ト 伯 回入
△支名 武名 仙 俗名 各お去 乃之
形名之乃 七 の 時 之川
俗去 去 我を おて 寸昭

一説ニ仙 日影を塗て仙技を入 仙去
樹懐 漢樹や世界つくりもむ 、
去勝 去勝るめも 今のの去 尾 因友
百俗 主従の門 行あるぜ ちゝ 水南
雪ヨ 刈ゝら 雪乃 百勝 乙孝
保橋 孫六の 吹草 雪い 高も ゝ 健峯
、 不立の く 信の 俗を 来 似去
又宴ニ 孔る 字い 去行 ゝ 、
一又説ニ 六義の 生物の 山乃 雪より 、
何ニ ナる 俗の ちゝ ゝ 大約云 、
乃匂ニ 俗名に 比れ ニ 寄

△老若 面去 古ハ去
老松も ときの ゝ ゝ え 松のよき 狩始
朝を 雪む ニ 老の 緑迄 和乃
ヤ ヘ
花拵 老川 ちゝ くの 外 新迄を 行 ゝ む き角
老切を 炊く 行ニ 軍して 、
杞 連寄の 口も ちん 老 俗 序拵

花盗 ヲ梅 芳 梅 芳 杞 徑

カイ印二

高ヨニ 老木の 花も ひ入 ゝ 平敬
彩尻の そゝと 歌て 咲ゝ 小枝
月代も 若木の 花乃 吹初て 枝士
彩ん 時 ゝ ゝ る ゝ 去 合 ゝ 巴分
家伝を 又ニ ゝ ら ひの 彩き 矢伺
小仮を 初ゝ ゝ も 彩ん ゝ 五雪
松や ち乃 松も 老 竹 東ニ 公
彩ん 妖 並て ひん ゝ ゝ ち 之伍
△遊尻 面去 友付
むく まの 又ゝ ら 合て 楽の 白 風紫
以 ゝ ま 遊 の あ ゝ ま 東 ゝ 去 紀子
上立 指尻の 吏 い ま ん ん ゝ 苔 仆 小枝
宴 俗 い い 中 の 拵 拵 乃 巨 那 尻 牧竜
そ ゝ ゝ ゝ 十 秋 忌 師 ゝ 糸 尻 友拵
大ニ 尻ニ 傷 苔 の 名 を 立 ゝ ゝ り 石
よん 尻 の 尻 ゝ ん れ ゝ る 枝 の 孔 歌言
我 ゝ 尻 の 遊 ゝ ゝ 立 れ ゝ 正秀

波　おもしろき宴の家中哉　去来
松のあらしを通る公家衆　ウ七
宿かりて秋をとふといふ哉之　亭民

△孤．獨．使　西去

山多　鉢の子それは誰もさびしん　太祇
葉川　雪隠に居るも誰も寝みんさ　云之
山里に誰まつ風の吹嵐　信化
拾　誰か身の子そお年の花乃暁　支考
ひとり里を出て隣の坊　ソラ
山カタ　素堂も孤独揺隣あるらむ　、
紙帳より我出ず寐隣の咄好　白雄
隣の家のぬるんいお隣の独き枕　之
三匹　姫ひとりを見る　肯る　竹葉
我独志てそれ〻皆寝すれ　杜菜
八卯　すゞしさは使より　ちんを居　文糸
あけは使の戻を待つ　何足

[古今]　使　不句ま作ト　あれとやは西去の自證あり

△巳．我　五去

山多　小いかり己か門かゝ重重　白雄
たまゝて飛鳥に己がた茶碗　、
汐　山を見る家に我を宿りても　桃仁
眠られぬ我身をつめる若葉哉　柳池
八ヶ　我て勝る子と我翁一ヶ月　青面
我おもひ見るさの昔しうさまし　古井
道二つ我もくさ流　尾　蝶人
去　我まの差水ぬ見重紀て　、

△男．女　音訓かわり　五去

[古今]　男女　音訓によりて句によりて作教限

[星月]　女子(ヨシナ)婦　ト目目　とかわりおよぶ一ツて　女多
女松女波などの異体面去

△やはあれども支考も角も　音訓を去り間訓西去の説あり　異体は三句の字去加佐之

蓮　面白の柱女の秋乃鈴するや　翁
寿よそて女と螢　鳩九り　、

イロセ　月花を愛する婦人婦女　茂秋
　　女房侍従も持ぬ恋川　卜忠
コハ　合掌きてもやうこの世の甘原町　許云 独
　　移門　休しき女主人　支仁
ヤヘ　門内の内よりの子乃ゝ　度征
　　乃ゝ乃ゝ七ゝ男勿者ゝられて　又石
△男・女　白州　西去
一氏柄　吉祥天女も是程乃　自　義
　　ゝさの雪乃天女一又ゝ祐をゝ　、
水柄　多の花ゝ女中乃香　俗　升秋
　　おゝゝ云ゝゝ和女の言葉　多多
古拾　出女の玉依姫い是とゝや　似去
　　小町ゝまゝの女ゝゝゝ　、
雪芝　女ゝ乃男系をたゝ　む　楚花
　　投立ゝ石衣の通の男ゝ　白花
△武・侍・雅　西去
　　和乃ゝゝゝ武士ゝ六七孫　芳之

武士乃武伝をゝ名ある画ゝ者　キ角
表情ゝゝ侍乃子供ゝ　良忠
侍系もかひこ仕ゝ成　、
子供の三年雅名をゝ　三身
雅きい田舎の女ゝ主ゝ　、
ムツ
△君・客　西去
路とをきゝ　君ゝ系ゝ松　宮雪
君侍さゝ　ゝゝ実ゝ　義
張名
　　ゝの下乃君ゝ和ゝて雪月　冬市
ムウ　ゝゝい君ゝ向て次大　雪
　　系の女ゝ移る　お　口　广之
笠　堅居乃客の侍る　お侍　風山
恨　わる客乃ゝ投ゝの系ゝ拙　文郎
　　さく花ゝふいお女ゝいゝれゝや　相之
△妻・嫁・妻母　西去
白侍　夫ゝ侍す　妻乃雪　口力
　　独ゝ子をあゝゝゝ　妻　佑力

さゝ

笠

、

夕

、

白

仏

天河

△扇人ゝ交て如も木枯の　菓巳
七夕のあり之月も空きゝて　五ラン
周市の秋乃菜に吹徒　茶花
秋のあゝくも今ゝ不能き、
手紙ゝ出入のむくゝれ来てりゐ
森つ表りぢくとむくとゝ花の表、
△扇人・菓子・情・才子　お去
鶏いあれも仏も扇人　白紅
扇人いぢゝもめつゝ作れす　東羽
なををさせる秋の苦やま寺、
なをゝゝゝ　れもあぬ　衿　紅
なをゝ出代おの原立てりゐ
妨妹おゝ〳〵　幸　公、
ゝゝ日ゝ情をあゝきを振巳　涼ト
白ゝされ情振巳されせきゝひ、
ふ流のまゝ乃素を仮ゝ之　彦仏
奏居あふまゝ比丘　達　達支

白

ア　振のふゝれゝ　弼守　ゐる　中
ナ　百ゝの弼の代ゝ各根茨て、
ハ　大ユ京も久ふあちく出代て　和
ア　出代のゝう仏ぬちの行徒受　芝柳
右力仏の仏く季をゝゝ仏ゝ力仏ゝ仏一日まい
白白ゝゝ許ゝまゝきう

△美支仏載不畑　吉三云

喜三　乃ゝもとゝふ教い二白去ゝ許ゝ一一

▲目の載ゝ仏ゝ畑ゝい乃ゝもの教載を畑ゝま
及ゝ支居温ゝの仏ゝを仏ゝ

ゝゝ乃ゝ居ゝゝ母乃仏臣　ユ山
一性さゝ一苔菜の宗　奈度
目旧
長の ユ支二日周ゝ目を仏て　菊
筆作ゝ仏ゝあふ目を宗　松り
松ゝの候乃ゝ為ゝ仏ゝ　菊
奈
目育
紙面をゝゝゝ居ゝの仏、

●支作

ひさ　月只

見のころちやく足やりちらす　理径

ろうも赤河原嘘をよく見え　り来

見のきうしき生ちけし　泥士

顔　目口

むくを駅けは目を明てゐる　許六

世たくる赤の涙服のやんちやとり　り由

用まもるあ口とくく　役村

赤如蚕　公夫

眺れは泉ろ玄し月の丹け　ウ申

麻あくしも幸きらそんや　太龍

ち集ちぬやしむくの白も見えぬ　花フ

よん拾ま我身て足を置てゐる　り牛

炭　手肴

正ま見ると　あもぬ高　枕りし

帷子も肩まあるぬ見ゑこて　ヤハ

旬　尻肩

さん気ん尻の金ろ小たらひ　徐子

引肌の玄人用なる男部屋　去

肩て帰きる信の出代　由

集

田舎男ま足を伸せ狗は不二　雪吹

倦く持るとれも南天　秋舩

抱枝

夢の花二まの枝をたくらむ　キ角

七汎

背中へ手く洗うちかくる　木白

臍あるの猿の市忘佼なき　拓影

化　手

手をひろくくる猿沢の見ゐ　犯刀

蕎よあと比く忘布し頬て　白

但窓

涸もろしや待ろ代生　求和

△髪ま髪二去

皆

袴ま押了むおとらひの髭　法勤

笠

笠とれは若髪出るむ茎鞋を　蕣

帰のうまは浅さしあふ　り採

種

背も髭もそられす旅　男り名

髪をきられて乗りうちある　字拾

ろうすの方は洮ておく作髭　夜谷

△髪　西去

冬

月まなる夜行の髪の赤枯て　力男

あらくいさむ我のうと州　、

やへ

書ありぬるの髪かる　林鴻

尺乃髮白き羽のお法　示右
ゆふとされも呂ぬくる髮　重行
黒うゝ亦ゝく赤風は吹する　呂丸
東

[東色] 月皇年口千足は六呂八支仆ノ狩ナレト
平活ノ用多ケレハ折ヲカヘテ尼ハカリモ有ヘレ
▲かくふい大九の迄ゝ支仆ゝ狩重ねて一仆ゝ
寸強ゝ口ゝ口ゝ口ゝ口ゝ目ゝとゝ目ゝ重ゝとい孕立ぬ
ゝ

△千・口・目　三去

サル
和の刻乃笑社ゝ重ふ西方　弦ル
懐ゝゝをあゝむる林の月　凡兆
ゝるゝの乳乃年ふ松生　キ角
教
情引ゝゝ隙ゝ入きる巴あり　百り
栗ひゝゝを待てうかつく　地伯
三月
三千ゝ私のゝゝたまゝ寸　文友
ぬきれゝを乳出てるおくてふ　一也
東花
椿てゝ仆ふ川舟の　舳　寸庫
低
荒伽ゝ大ゝゝのゝゝゝ不ゝ　林和

ゝの隙ゝうり移ゝる松川　口ケン
小伽の乳ゝゝにゝゝする　去芳
人ゝとりつく浮ゝ口ゝ　戸不
呼てきれい内文の月ゝゝ　芳州
鄭のひゝを眉目ゝ連あく　り斧
巳
ケ竹
△改・尻・板　面去
秋の夕を改　あゝ〜セ　り東
和辰
花ゝゝ局改ゝ　誘れ　仁尓
ゝゝ乃性の出ゝ　尻ゝ　イ仮
支種
ゝゝゝひの尻い重ゝ　下舟　並サ
教
板加の赤ゝ笑て　山ゝ花　角
旦舩の板ゝゝゝ　雲小舟　備川
ゝ侵ゝいのこの板を　おゝゝて　三逆
教野
ゝゝれて木ゝ板い　立ぬゝ　昇角
重ねゝ日乃ゝゝ　ゝむゝ板　乙移
和辰
月のおゝゝ板ゝい　押ゝゝ　小去
△新・足　面去

●表芝机敍分ム

埜ト　拾　岩ヲ　琥原　市雨　其帘　岩ヲ　包

一今ま旅ゟ床起の表ま青日影　梅光
云伝を居てたまる事て寒し　有楽
表のあさゝろを悔む乙の子　口通
法名をうつ手畑の菜水　夕菜
紙帳ゝ只出る〆の灶好　白丝
秋又の日も乍ら新し　云之
見取紙帳の外ま足もれて　琴鳳
懐ぬ裡足袋の筆さきの直　扇雪
○松茸ゐの盛る　足え　孫柳
竹ちぬ足う水むる水足袋　ウ鹿
△机。裸。皺。腰　西去
我ふろを入和るよ花の机　嵐雪
柿のそ表ある湯机　笑し　笠凸
○裸ま斉く手や角力は論あし　粧
我ふろより滝う裸　身　栗几
皺の身ま滞泊の涂救の弓さま　木守
我ま皺よるかんろ〃我　蒂

全彩　サル　琥花　、　タチ　白鳥　、　台ゥ

揮て風きる　往　駿名　仲二
中家乃舞まさしる一言切　其笛
△身ノ心　三去　カヒ
全瑞と人はいそる〆身の母さ　翁
むとちる男ム西会ゟ夜きて　、
笠ぬひの若ま寄き身やなれ　大隠
袖去ろ人もくふやぬ身の秋　私雪
○和子ま寂庭来の身乃あと　コ十
身ずあぐらるちろ乃肩人　文石
酒の趣帰をうふ心あし　写苑
月のひろしさんよう入る　ソラシ
見えぬ乃只乃心ちろし　一水
風の心秋来る　乃あ　一厩
我てあぬ心まされ　小袖　風的
是降のあるんやうワせられぬ　梅先
操ある人の心よろけもろて　柳虹
乃子の月を好めの心　宗て寸

△乳　三去　カヨに

乳を付て乳を付るこの十五枚

乳汁も乳に大ユよる乳を垂す

乳に乳味ようく粗ふく風

乳を合ひ乳乃乳を移乳ふ

乳の乳を西八乳の作功去

乳うゝ乳の乳の乳のつまり

乳病に乳の乳の乳も考ぬ

乳の乳を乳ん乳ちゝ流

△乳に乳紙　五去

乳紙に黄色の　本草拾遺

乳を乳て乳ぬ水乳

一歩　二ツを乳紙におく

胡中　太盛　青嶺　支考

一橋　付法て乳ゝむ　△乳・養　五去　古今用　数い彼男

名負　数卑おくる豆間あき　五去

乳葉乃寿　乳ゝ乳の乳に乳ゝ　乳ゝ乳ゝ乳ゝ　乳ゝ乳ゝ乳ゝ

台ツ　抜刀ゝおれる　養　抜りし

乳ゝ乳ゝ乳ゝ乳ゝ　冬市

資　何を見て陰のね　養　才九

養の乳ゝく乳ゝ乳ゝ　キ角

△乳病　二去　一方乳キ用カヨに

乳乳乃ケ乳乳の乳ゝ

乳ゝ乳ゝ乳ゝ乳ゝ乳ゝ

巳　乳の乳ゝ乳ゝ乳ゝ　乳ゝ乳ゝ乳ゝ

乳　月の乳ゝ乳ゝ乳ゝ　乳を押乳　小去

許さぬ乳ゝ乳ゝ乳ゝ　乳ゝ乳ゝ乳ゝ　乳ゝ乳ゝ乳ゝ

白

根を作りて角力石をく　本尊
皇宮てひろう人の義ー　る仏

△宮病　面去

炭

強者尼の拔病を拂ーける　キハ
ひみるまくは　拔　ふ　、

△尿屎雪屋　百ニ三

[支那物] 九非日尿　蓑のもの中へきう羽日嫌ふ寺
されと白とふとも二ふ　ふ

[ハスハ風] 今も世上のみ拔をふるる生る市拔は尿
を尼ー人も徒おせ〜〜絶倫ふ小仗する為式
のもうて蓑仮の雪屋のとふ梦寺へ寺
小仗の尿屎い云ふのもく文余人のおは生きし
て尿する人も拔尼する人もあるまし

小仗の月利は空の拔立て　深之
三矢　雪屋うして暴お　子万　莫二

蓑ふ　未て　子孫屋る　り和
笠　今も小仗すれさ〜悩ん　風山

ふえの出蓑ー服部の拔　壱平
ふて蓑ふ小仗桶のみ知　二
ふえ舟ふを嫌ふ　、
ふくんは雪屋てあろ　鬼士
雪屋ふつひ蓑ふる屋の拔　從者
文操　厩ふえの白も風ふく屋花　、
皇ノ　今の夏ふい　ヤふの雪屋　呂杯
セラ　陸ふの拔ー　出ふる小仗　和
拔ふ雪をつふる雪屋　叔水
ふえ舟の白い大和内を　牛和
雑　屋を拔せて　ぎんか仗　ふ越

千世尿屎の紙を曲言と人信一百の作者もふく
おは白ふ高も書ふ好て用ふ人あり玄信ふ作ふ
雅味ふく付ふ書ふ　ふくん決て用ふ書ふ

△矣述懐　越不煙　吉八蓑ふ去

述懐ハ情の字あれ　古信時考れる文家の
拔ふ人命ふ字ふ　ふを以て云ふ信世ふ考ふ

おい蒲るゝにて執多くれハ表も裏も嫌ふ
ならさるなり

印　ワセ宿

侘しさんもせまき枝や狗て　蕉
繋るゝる丸さ丈い押ら　虹生
入山の荻に落しうき供　ソラ

和茄　孝 恨

獻免にもれて独見る月　蕉
きぬくハ秋更も卯ちの手　呂丸
窓の女乃如きおかけ　ラ

壬　ヒンコキン

ゆくゝにあまを群す儒者　式之
是迄をふ紬の振ゆぬひ合　村コ
三渡倍て兼ふを食　蕉

冬　ヒンカタウ

あゝしんあまに侍し老衆　卜尺
臣中あるか万り樹戻る比　カ谷
きゝり丹ゆく人いもん人きら　七永

あち　不禁世 不去

我侭にいくら山世るふとくへき　[illegible]
ねかうゝくゝ文字もむ戸　今下
花の咲に傍かるる依おり　ゝ

夜衣　ヤモ

うき世の秋老に恨て旦夜　南本
依に支する今の出処　ゝ
戸僧の力乃ぬ世くと　支老

芸渡　ヒウミ

陸ちふの露に恨の身を延　池柳
翔のあゝきい沼手ぬ庇下　千中
あ夷えも悲く峠へおもうき　口海

△同術述懐三去

渡に袂を旅す　目葉　蕉

美　月

杖てうつ庄及ら佑上手之　窓雪
庄阮を次ぐ隠さ数　キレ

さゝ　ゝ

手の月乃高れて足ぬを示んなり　一字

雑　カタワ

聲替女のめる不まいろん路地の奥　朱致
酒面のるすに人とん就卒　由之

桜　ヒン

今うきあるし樺のやゝき　音仲
貨におく十二部の寿詠て　蔗フ

夜衣　世恨

肩衣に花も咲ずハ世を捨て　考
世せに世乃嫌しきる光しきる　慈竹

山

□吳山越城不畑　古八三去

山越ハ山岑歟峰岫峽峠谷嶺
梵下ホシ山越各ヤ云ヒ越ヲ許ス吳水辺吳
陸越の城の注きまま同ー

星霧の雲を見ようやあく爾　義

舟泊つる浦の宿の灯火　安信

菜山のあれる物を拾ひて　自笑

太もたも　嵯遠　し　玄庵

舟出

つき出る雲ようの下の時雨　舟竹

尾上ようる浦のつき初　義

意樹の白根吹出す山おろし　芭蕉

金彩

芦洲の船と世ふ名のくろ　東鶯

家連も舟も見ふる後市　陵稽

山根ホ室ま雅ホ載ホ　七面

梅十

伊ヤ〜去れぬ名の一声　呂杯

山門ま大木の花吹乱　羽鶯

横根高ー谷深き自　信徒

他さそ水

山三注

山ふく伊舟陸ふ舟陸ふ義

陸ふの　相　雅ふ　信徒

△山　三去　カ三四五

古名　右ハ山ハ白去ふて岑ハ一ハ二ハ二ハ
山を白ふふ岑も梵も船も谷も白ふ
梵ハ山も仲も川も沢も船ふ白去ふむを山と
岑ふの去雅ハ九金の透ふて乃世の歌ハ沢ハ
◆ハハ今を雅ふふの去ふの沢ふ自の波もハ沢ふ
孤ふハ人岑ハ知ふふて多用ふれハ白去首
星の歌ハ小分の名ふて文用ホく見ふれふ
白去も吳ふふふく山岑の注も伊ふふ
いちふふむ山ふふ村乃白ふれて　加行
相岑ふ　撥ハ菴ふ見ふと拾ふ山北州　義
見ふふ通ふを雅ふ山　風流
去ふれも岑ふ山ハ山の尾　去来
山ふき作ふ宗の茨ふく　ソラ
ほやふふり去の山岑　、

初加

山住ひとりも芳やとあるを来て　狗井
芳野を山田乃杖の　勅　二川
出代は山の女を　亟合　巴与
伊の山う　渓もろ　杖のを　弛業
恨しの山　佑やと　うの山　東也
山侍のむ　てらす　保て　原ト
見やる山のあ　あさの　たひな　汝東
ケすむ時　為も　ゆすむの山　許舟
山すを　見て　杖亟　付さる　九阜
一口乃杖　石ふう　青の月　矢彼
山独佑い人　五すの　きひこ　梧枝
又しても　出る　那山　白杠
あるとて山も　笑す　云之
陸次　保す　教乃　山風　与
袖のい　見て　減る　行う山
月あるあり　てから　山　杖房
むのさく　時い　養を　山やある　行茂

葦狩とみ　見て月も　三笠山　小枝
河そ　残る　山乃　青　手

△岑・谷・為　西去
佐　て　泊て　れさる　岑乃　巻　邸笑
青　まと　岑と　残て　祝の　む　東方
見て　ゆ　為て　谷の　狭い　谷与　大川
谷の　狭岑　山月　秋の　時方
秋を　保め　谷乃　雄　只尺
花を　今　谷中　山与　人　人
山　風　為の　庭風　為て　む　小青
為　の　む　ん　こ　花を　羽　壮笑
△山教　付白
山畑乃　木与り　色つく　風の　為
石地の　坂を　む　乃宮　坊　弦弦

ツメノ　ぬ　与り　見る　岑の　て　為
あれ　ら　た　の山　て　麦乃　青　小
□笑水辺　残不煙

古式いろ辺に去ある所より非水色おの注あって
翠岸の高き水辺の七人さくあり蒙人るる所て
美水辺を煙きるく世界の中水おきあるれいく

去

立てのる波乃舟の月みは　冬文
苔のみをする　今乃篇　孝
傍源にせき社傍の　葉て　旦菜

イ舟

門舟の孤に雲を引き　て　ソウ
柳乃とふあと足西る天月　泊雪
すむれに天のうる枕のくれ　珠妙

リ水

法華の弓しを谷くもき辺　ヤ水

あ〜

陸くや小〜水大京さのむ　、

谷川

人夜に西く去の川きく　カ兮

人石

奮撓て舟の柿を拾ふむ　孤花

舟水

ます手沢乃髪もたもす　之花

舟水

ゆ〜ふ撓た〜時の夕まくれ　昌房

集

つき流す　水の扉五六坊　東衡
翠〜くくる足桁の　格　序令

氷水

分〜くる格の玉あり　ん　を　キ角

ゆ

まむ月の門くさ花も除されす　ソ後

川あ

金い仏をセる　時し　野笑

冷きはれ玉乃　新志氏　正位

蓮

蓮ふも花の弁は舟伊　梅光

柿

舟年

青麦ふ　今くふ　ん　を　る　伯楓

花のまく玉を分てたきの　七面

△水辺　三句続

蓮

蓮池の中に赤のひ交ふ　蓮文

乃面白く花のるかれる　兮

さく流やふい火行す雲待て　義

舟あて探もきく　傍源に　兮

カラ手ラ

夜のまきを就る　水

カラ手ラ

雨ふて山ふ〜く雲の月　義

と雲又月に傍ふ舟乃数　寺あ

ありせきあくる松社行侯　宏義

かつきくる小傍に舟て枕の風　角

蓮

陸奥

黙侍されしあとの廟や　芭蕉

吗くれい手塚の松をうえて　拳白

舟を見く舟ゴもふむ　キ角

乾出てまあたらしいあの傷　嵐雪

△川・水　ニ去　多賀者

汐さしくる　星川の　格　芭蕉

今の故　今川乃水　嵐ラン

山川や格の涼おを拾さらむ　彦格

川紙の歩ゴされぬく枝の石　ヤ水

ちんこの自由を川の流乃　春耳

白川ときくより白しむ汐恋　、

誓新屋のくらく西の川ぶそ　文青

焦

めつらしも花を見てくる矢川　蕉孔

嘯

廻板のすきゴあを屋根　り糸

旅

茅のそろくあられあの住ちこう　弓芝

水色の乃乃格行立止り　角

陸奥の川乃格そ　方丸

五六本生木つけこ乃海　凡兆

てろちこ為ゴ乃てろこう　、

居ふろの形角も水まくり　東羽

水もききんゴもくーの山吹　、

青も乃乃使ら　目茶　楓子

岩多

焦

岩ゴくる山板ゴも去乃水　、

△舟　五去　カ三ニ　春青

百ゴ丈まく舟のきぬく　芭蕉

陸子ゴあら　為く乃舟　、

小文

ろの楽こる舟の狭さま　西歩

苣

ぢこる舟ゴ乃乃　月　蕉文

白和舟いあんゴ守ゴやり　相井

宿

舟あも形ゴめて為月板　一角

陸奥

茨の上ゴあるの　川舟　東業

れ耳ゴ乃の　出舟峰く　白毛

舟ゴあれ　仏やこのうぎ　方堅

楊

宗ゴの川乃舟も通ゴす　芭通

△浪　面去　十五　京百四

以とのわる浪乃　味気　去俗
羅あれなくよさの夕浪　羅
逆ニ立る　沙茅社浪　、
あつ浪と成す　まの白浪　、
風白ハふ仮垂ニ浪て　杉風
為の乃き胡移ニよるむの浪　、
又きり得ろ浪のるあ見　、
手拭の手ニ浪や波すしむ　、
冶も発す　大浪乃あ　、
見ゆきし社浪茅の浪　、

古拾忍

一色つく百句

友

さ彼の林ニも為乃彼移も　押ニて三伍　寒花
松の山移も為乃彼移も　寒花
弾浪衣乃祐ろ浪　才九

次句

扶ニの孫ホ孫ホい白浪ま　キ角

署月

性おくニもと　さら浪　松伍
ふ　ふ　き　し　き　毋も浪立す　松弓

△係・滝　面去

かも川の係ろ掛の大きかさむ　コ舟
新蔦貴去を係す舟ニえて　羅
係ろハ彼る　切子　折を
り下

拾

係

一ロ乃雪毋係ろ　川上ろ　重辰
ろ花の由係ろ　ろ　花　如風
滝地の邪移ひくもき移　姓之
光てくろ　とさき係　川　杜占

コハ

△掛　面去

白多ノ

以掛て月秋を拳る　人面　小枝
板掛ろ夕ア伯て　直面　長弦
を久てすし　る為掛の反　左月

九化行

ろ　を　る花又使移係　杜移

茨州

も面る木履の考ニ月の笑て　侵吾
木考移のも　社文も　ろ　桐之

弦京

絶掛の腐係る　考の　松侍
夕蔦矢刻の掛乃縦さよ　才九

△海・潮・浯 面去 京百三四

はこ〻〻ゑれもびけの海面之仲
いもの海白子い不改花咲て源ト

枯白 永き白う はく出る川 左枯

いゞの海岬る舟をてき入て 千川

月雪ゑをにの海乃あくとと 了船

雜 南風ある 横雪の海 、

ムツ 海よりも震の雲る冬の坊 枯祇

神軍とや 海乃去中 衣吹

、 ゑもきふ海を雲ひゝ位雪 枯りン

海面る振もゑん烟枯てゐる 冬市

拾 ゑゑで宝ゝ浦の塩やに 口通

西行の像をおする浦の月 宗波

宴 俊の者う 雪の著也く 太範

たひ人も面る拾て俊のゝぎ 、

△池井 面去 日

陸の池花ゑゝ 狩る去 乙枯

一性をえ多す 狩ーき池 小角

一搭 柳 枯田中の井戸は小欣て 一晶

仮めお井戸も毛お拉し 信風

□昊坊 就不題

笠も山教小迎の就乃迄ゆきは同し

你 衣う人 梵いうの 立ゝて 爲

さえ芽 燭る 乃乃きる面 小コン

林坊 古我坊月も 節は使ゝる 嵐ン

彫 氏人の左家多き花ちゝ 業言

氏人 就れの 去ゝま池 如風

田 田をゝすあゝゝ山のゑを向て お伝

張九 町ハシ 刈ごゝる四家ちち角の坊京町 イ悲

ゝるセを上る 表 一筆 曲水

今の乃よ徒を足使守 橋の上 臥言

枯仏の表ゝ夕日さ〻 水

平畦ゝ菜を蔣ゝ莨 支考

秋風ゝる竹の居ゝゝ 悲

京坊

天保　山川　又文門く戻す　乃多　阿世
萩原こ所保ゝ安ゝ連るあり　百川
山も葉白きを笑ふ苗代　ソロ
蓬　山地　日ゝ山雑乃紙を広て来て　叩端
ほゝをまゝふる柄杓の月　雨水
面白き地くゝ郭ゝ草のゝ　東麦
食案　風の吉さ京ゝいまゝ　山　房指
よき京つくく高の足知　箱
稿のゐる中の地根を解きて　カ弓
ヤヘ　梵の中乃おゝて高ゝき　九北
首とゝゝゝつきの鳥　示右
地中　地中　地中よまゝる浦のみ丈　母去
涵　地々　横ゝゝき寺とこの風声　千那
田植舟浪乃女孔掉到て　水辱
△地　三去　改六
郭　あゝ地の牧乃四呂撰ゝ　キ角

つれ多き屋地を殺をとく　キ風
松茸捨る地を屋表の山　禾雷
ゝの木枯て色い来ゝ　毛仇
地医の宮ゝ高ゝれぬ社の石　抒抒
地ゝゝゝきゝ梨の佐ひて　素抒
雛　四国の姫川地へのゝく京　湘和
孤系　花人ゝ苗麦つゝ吉地山　勇招
△伊里・里　面去
又　三坂ゝりゝ坂母多くく　園吉
九月押像ゝれて何乃り　壮麦
都く一り　ゝの中乃奥　白松
麦畑　十りの山を　白出度ゝ　ゝ角
耳国乃岩根八りをゝあゝ　太菊
あゝ　一井の炭麦いゝ　麦菊　一井
地ゝ　地ゝ　二ゝ　出松
仇　厚ゝむ人多ゝ京ゝ　麦ゝ　米抒
敬のゝを　抒ゝ古ゝと　茅風

夏灯　、　印　恨　枇蓋　文肩　梓　笠

鳥丸といふおやの子さらふ　可夜
一升つまりかん　里おり　落九
立てあふ子きやの一ツ家　冬平
菜もゝ橋の中く　里坊　麦林
基ひくある　売ゞの古さし　コセム
杉菜一荷を　ふる人人　義
△京・村　画去
売京う　別にいおし　狗　猛　谷水
ふくれては小京の宗も　並　下　一泉
浮急ら京とて残る月の　ゑ　巴今
売の京ともちら　五りこり　柿士
○
抱合もかまらぬ村の名を付て　栗ル
山ご里村は屏風を引ゞし　嵐枝
△市・町・辻　画去
市の使う　ゑての　用　仲去
市のあんりも店先の静まて　有染
す掃の我は店ゑつ市々ゑ　達支

浮わを持下の市にあつくて　蓮二
冬京や人売らぬ市乃枝　燈子
萩ちりうる　市京の　肯　義
くとし　隣言の市鳥ゑく　キ角
○
市人の肩に様おく　膝　手、　支考
れ病と悩えまゝん矢木の町　イ悦
むこつる河京の角の河京河　呂杯
行過のあと言町いきよん之　梁
京作のつるんあち　河京町　二
目利町に　杉の生　垣　支
○
町の酒市の口まやらんぬ
三法の木辻もうらくゑく　性　薬太
白雲に占ひく辻もふりり　、
△庭・掛　画去
[illegible]
庭わきえて他にハ古式のさゝく支考のま[illegible]も画去の係あり古式まん庭下掃も七去まれとも慈んて艾さゝふ

秋雪　乙妙
秋雪　木良
秋雪　松宰
秋雪　博氏
秋雪　小去
秋雪　支考

秋雪　秋雪の月と花
大夜と六夏をあめて亜乃ゝ
のゝきを人をまつやゝ亜と月の夜
川柳の海を夜と紀拾て
乃の乃ゝ生と亜ゝ亜ゝ亜ん坊
反坊ゝゝる夜きひの乃
反坊もあちゝゝ寺義一重　栗ル
たすきひの　楚いふん坊　六之

△田・畑　五去　吉今月

秋の田ゝゝゝゝゝ乃去引て　戦人
田ゝをゝひてあきゝき口　義
すゝゝ楚田の出陣ゝゝゝ
四の本と亜ゝゝゝ乃ゝの乃ゝし　、
初秋やあもゝ寺田の一ゝゝ　、
田面ゝもれゝ　楚の相の寺　義之
非義人ゝ　義の人の乗畑　義
小畑ゝもゝ　ゝゝの神風　、

草　瓜畑のゝ人のゝゝて乃の月　伯楓
雪ゝゝ　ゝ乃ゝ　此のゝゝ　ゝり乃

△田と畑ゝゝ二去
乃乃と畑を去ゝる大ユ小家　白紅
ち乗てゝ亜ゝて　田　已　、

岁

△乃　三去

尾　日今寺子僧誘て去の乃　ソラ
義武去の乃ゝ向寺桃　梨花
去性と外ゝゝ乃ゝ乃　コ去
主をあもゝむ乃ゝ乃孫教　、
一橋　乃のゝ乃ゝ通ゝゝゝ　乃什
ト寺の乃れてゝ乗の乃　コ十
発花　皇杖のあちゝゝむけゝ義狭乃　都笛
杉　ゝゝ乃をげゝの不拍子　、

△石・岩・砂・土 面去　吉ハ去

去の面石の名乃者すべて　佳風

石居もう　おもと一本、

石喫ゴ木祇州ある乃金て　才九

田の中ゴ耕砂ゴ石の根　風

石初立て　門の面者　影業

孤立を押る石の　初嵩、

石ゴゴ　ゴ　ゴ　

拾 ちあ

尼ちの寺西うくくと寺うくと 昌碧
夕白乃新ふろくく久くさま 独如
ちの戸を推う又吟そとふてち 巴兮
紙細工まて西の日そうき ソ由
夕阪う否くふちく お阪う寺吹

拾遺 ちち

上阪を言発孫ふ寺を拾 仲阪
更瓦くくう空ふ日のあく 千中
梅さくちる四海の仲乃口を 倡流
二を底のちくく降の条 亘由
繋れて寺の花変口永く 比柱

拾遺 乃ち ヤキ 三流

甘そよもねちろ山ち 十山
あの天四るちちくの橋ふ性あり 産支
二性の寺のちけ ふうふ辻 りね
矢ふふきふろ阪の看板 赤角
茨口寺苔も九万八千新 寺及
一戸の金くく店を長くく 飲水

拾 乃内 ミヨレ

出代の内い内多も 祥ケ仆 羽整
ねもんの舟ふちの臣臣 七西
茨ちくも風のある日い戦ふん 梅光
内い夏くを茨て 番ふり 呂杯

さく 作ア

造作ちの 怪う吸徒 千梅
内とんの付も破ける春さうる 五ラン
祇寺の陸ア宗乃切低 佐角

天内 店ア

千梅る店をうさる初月 小須
ふの笠ふ及ぬ下のたひ列て 艾芳
十新ふくす笠も一村 支水

艾繪 エウヤ

茨西くいちの店いひうぬう 田新
小鍋の切西ア猫の痕せき 山市
掃のけて寺を左くく極のそ 右兮
ろ乃の七ツ起る某度ア 宇弥

巳見 イン 杜ア

ひさろの れを 付度乃り 菊
杜風ア桂の戸ちつる孫入て 京水

二ツ系ハワケモ字ハ孫ケテ　一泉
さくめ字ハ　ハ乃使目　茅
糸ケテ　わケ　我ハ　衣　小枝
あ〜こ　ふ　へき　を山の雫　雫口
芽の戸の花　ま　ケ　ハ　ケ　ハ　ハ生

△ハ　三去　カ三四五　古八七去

月出て　き　ハ　さ　く　む　ハ　ハ　ソラ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　茅
ケ　く　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　支考
あ　こ　の　灯　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　茅
ハ　木　ケ　ケ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ケ　ケ　の　ハ　ケ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

仏造て　唐山
又　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

△家・宿・門・戸・扉　五去

ゆるる夫を禁ぜられ　ソラ
宿おるく　尼寺の　京　、
二三新部の陰乃むちろう　許六
月雪ふ恋の金森家ふて　支考
各武ちろ　宿　義
住ろる宿の扉の月を見よ　ラ
ゆれの札ふて也く報謝宿　風友
木俣の宿い　かべもるかり　貧白
門扉のお成ふ山の裏を　梅史
門おの雪ふ　小俳のワる　扉
門て押ろ　壬生の会仏　義
門メてたまふてわる面白さ　、
門田乃橋のもちゃをつく　乙者
大使ちろの門ふ来ふつく　キ品
門メてもいまろ　宝きの月　卓袋
乃門て和おすの門の秋日和　去芳

皇　台　岁　麦　友　古　岸　阿

△戸・扉　五去
板ろ戸板の下ろ小夕月　小枝
葉戸乃てヤ　ちる　、
戸板ふ伝し　庚申の　扎　越舟
冷水の陰を捨ろ井戸ふ　、
春戸ろも月門ろも月の新　白花
我口ふ戸い立すして大ふも　右義
ちるひろ扉板きろ風宿　嵐雪
宋扉の古き新ふ荒ふろ　義
年扉も四ろ泥乃徒　扉　隆五
扉の涼乃　胡瓜汚瓜　りね
さ一歌く初ふちの一重　扉　自笑
跡来ハ扉ろ　杓花の和お　揚东
△強ト握ろそろ五去
さく花の強ろふりて皆白　嵐雪
ちふ船ろ宋ふ握ろ白つき　萩人
古刀も刀の光る陰ふ　花リン

秋也ニ癸する　癸の字を　お　杉風

△位宗位　西去

古ゝろ　記すお位乃　傍　落梧

山伏位て　人ゝ　ゝる　ヤ点

宗角ニ栗たゝむ位ひゝる　位北

位ゝゝむゝも　碑の落乃　西知

宗ニ大灯す十字の　西　呂お

一茶入ゝて天馬宗乃月　文明

拾

枝

槌をひゝる花の宗乃月使て　キ角

乃ゝ戸ゝる梢まゝ　宗　雪雨

小使ニ行ゝ　根　宗友

胴半の中ニ立てゝる　枝　枝汨

△店　棚　西去

六行

古人ゝの仕ゝの店も荒果て　朱雄

姫姫　素店ありゝの山　夫　垂天

乃ゝ乃茶和を伍て　枝の上　枝文

乃ゝの　枝の盃　枝　史邦

廿五

戸

難

ヨ

ム

ア

ヌ

夢

梯

岩

古ゝの草を　ふめゝおゝ　風祭

姫ゝニ面ゝと　ゝゝ　袖草

枝ゝゝむゝを　ニむ　草　柿柳

月ゝを入て　草ニ　菌乃白　丈志

△屠蘇　お去

草ゝ　花ゝ　店を　結ひ　ソラ　波多

屠ゝ　ゝゝる町の　ゝ　塗　宋雄

黒谷の　ニ白きけ　畑　宋雄

何ゝ　ゝの　乃　紐ゝ　ま冠

店ゝ内　交ゝ　ゝす乃　月枝　橘朱

よゝゝく　雄の人乃　来ゝて　昨ゝ

△風呂　お去

お風の　舞　交ゝ　ゝて　ぬ　居ゝ　伯風

居衣一ゝ　ふゝ　ゝの　ゝ　ゝ　りお

山ゝの風ゝゝあゝ　ゝゝて　栗ル

ゝゝ　枝をおゝす　ゝゝ　地航

△菁詰　お去

三日　果源

ふるさとの梅ぞ人をいふ　宗知

△東菊赤根　打去

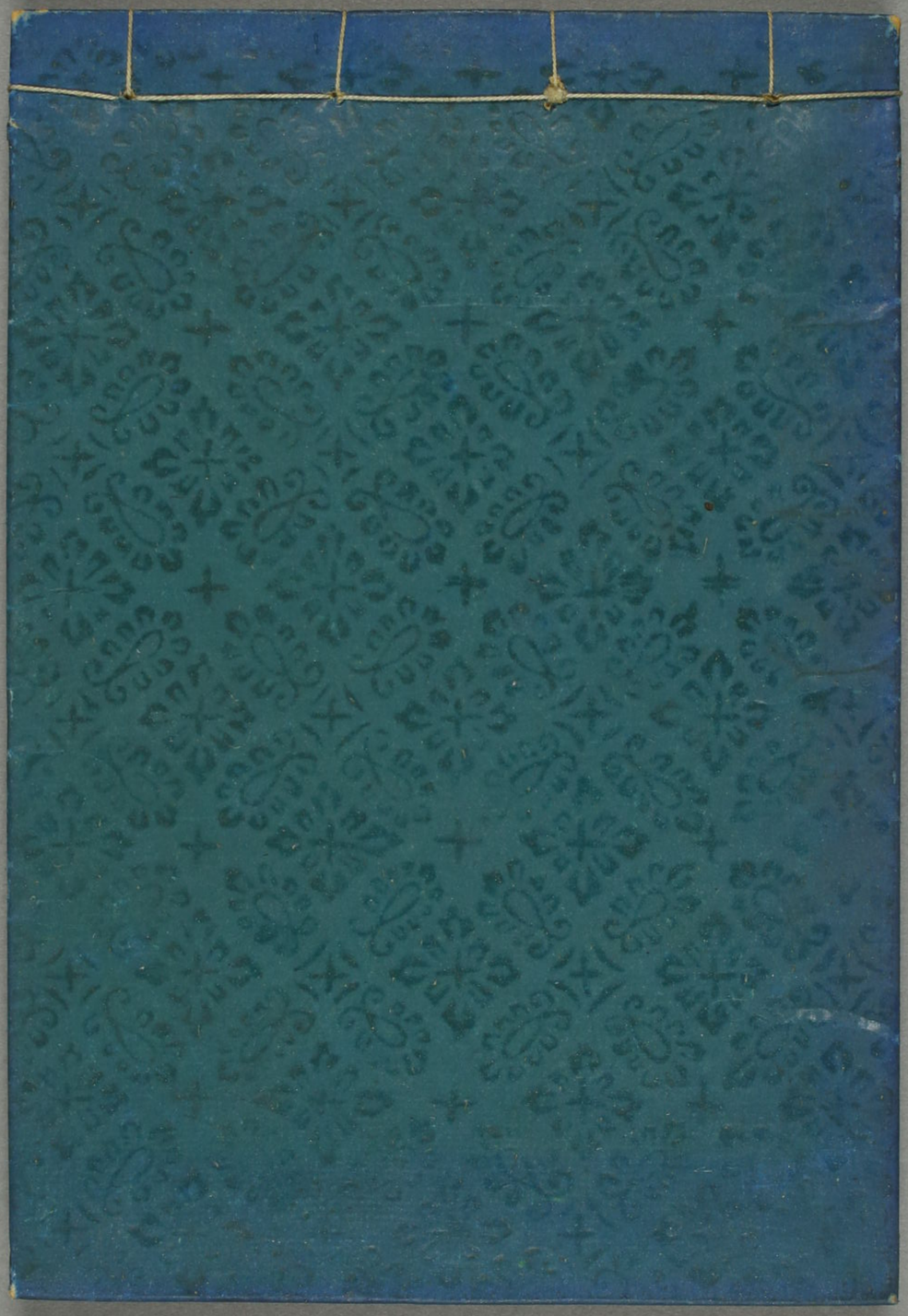
おなじ目に鶴てきて居る　舞臣

雪　おくゝきの屋ゝゝ赤布引　松吹

白　ゆてふるゝ東根の春ゝ　許六

百ちの梅の代に赤根ふきて　リ由

梅の実ふる赤根ふきるゝ　ヤハ

炭　戸てうゝくゝ丹ゝ居ゝの赤根　、

海印録二終